

## 第六章 経済成長と新制高校の発展

昭和三十五年（一九六〇）から同四十八年（一九七三）まで

昭和三十五年十二月から始まった校舎全面改築は、本館、管理棟、林業棟、工芸棟、寄宿舎、体育館等に及ぶ、開校以来最大の建設事業であった。これは学校、蘇門会、PTA、木曾郡の総力を挙げての取り組みであり、新制高校として再出発した本校教育の充実発展を象徴するものであった。

三八年一〇月、創立六〇周年記念式典を兼ねた落成式典には、一千人を越える蘇門会員が母校に結集し喜びにわいた（写真）。



## はじめに

本章では、敗戦直後の困窮状態から抜け出した昭和三五年（一九六〇）頃から、オイルショックを受けた四八年（一九七三）頃までの、本校の姿に触れる。この時代は、米ソの冷戦下、いわゆる「六〇年安保」の政治的な大混乱はあったが、社会や経済が安定し始め、さらに経済の高度成長を経て日本が世界の経済大国の地位を確立した。その意味では日本の社会が大きく変革した時代であった。しかしオイルショックにより、図らずも経済基礎の脆弱さを露呈し、さらに公害など新たな環境問題が深刻化した時代でもあった。

戦後、新制高校として再出発した本校は、大きな課題を幾つも抱えていた。その中でも最大の懸案は老朽化著しい校舎の全面改築であった。この課題に対して、蘇門会を中心に「長野県本曾山林高等学校改築期成同盟会」を結成し、学校、蘇門会、PTA、本曾郡の総力を挙げた、まさに大事業となった。

こうして完成した明るい校舎及び充実した施設や設備は、本校教育の飛躍に直結し名実共に新制高校としての教育体制を確立し、その発展の礎を築いた。

しかし、その一方本校を取り巻く教育環境が急激な変化を見せ始めたのもこの頃である。その最たるものは国民所得倍増計画に代表される経済の高度成長政策である。これにより、従来からあった教育熱に加えて経済的基盤の確立は、高校進学率の

急激な向上を可能にした。その結果、生徒の普通科志向、多様ななどの新たな問題を生じたのである。

この成長政策により、都市集中と多くの農山村地域の過疎化が進行し、さらに工業重視の政策は、林業を含む第一次産業の衰退を招いた。また石炭に代わるエネルギーとして石油が普及し、いわゆるエネルギー革命が進行した結果、薪炭材の需要も激減していった。また経済成長による木材の需要増と木材価格の高騰は、安価な外材の輸入自由化をもたらすなど、国内林業は極めて苦しい状況に置かれるようになっていった。

こうした社会環境の変化は、林業・木材工芸教育にも大きな影響を与えた。しかし、本校ではさまざまな改革が意欲的に試みられた。先ず木材工芸科では、昭和三八年「工芸科」と改称し、さらに加工及びデザインの二コース制を導入した。また林業科も四二年に経営・林産・土木の三コース制とし、生徒の多様化に応えた。また本校の実験・実習重視の教育方針は、大きな力を発揮し、測量技術などに高い評価を得、時代の要請と相まって産業界で歓迎された。

またデザインコースの設置は女子生徒の入学を可能にし、開校以来初めて女子生徒が入学した。こうして新しい雰囲気のある園に変わるなど、名実共に新制高校にふさわしい学校づくりが進んだ。

本章は、本校の新校舎に象徴される積極的な教育改革とその成果の跡を検証したい。

## 第一節 教育を取り巻く諸情勢

### 一、米ソ冷戦と国内政治の対立

戦後の世界は、米ソの冷戦と軍拡競争で幕を開けた。特に核実験と核兵器の開発競争。宇宙開発の名のもとに進むICBMなどの開発等々。東西冷戦はますますエスカレートし、国民の不安はかき立てられていった。

こうした中、昭和三〇年代のわが国は、戦後における最も激動の時代を迎えた。米ソ冷戦構造の中で、我が国の政治も極めて激しい対立を続けた。いわゆる昭和三四～三五年（一九六〇）の日米安全保障条約改定問題は国論を二分し、特にその阻止闘争は激化した。

デモが各地で行われ、国会周辺は騒然たる雰囲気包まれ、ついには構内で犠牲者をだすなど、大揺れに揺れた。しかし同年六月、新安保条約は発効され、混乱の責任をとって岸信介内閣は総辞職した。

また三九年六月、ベトナム戦争が起こった。悲惨な泥沼戦争に対する反戦運動の波が全国に広まって平和教育のうねりが高まった。

さらに四〇年頃から、学費値上げ反対闘争から始まった大学紛争は燎原の火となって広がり、学問の府はヘルメット、スク

ラムデモ、怒号、暴力、破壊へと吹き荒んだ。四四年一月、東大安田講堂の攻防戦をもって紛争は一応収束に向かった。

このように激しく動く社会の中で、大学生達を主に高校生も含めた「全学連」「全共闘」が組織化され、人格形成期の高校生にも大きな影響を与えた。

そして、彼等の行動は既存の学校教育のあり方に大きな反省を求める面もあったが、その一方過激化していった核マル、連合赤軍等が、反社会的行動を重ね、世間の非難を浴びると共に、我が国教育のあり方が世界の批判にさらされた。

文部省による学習指導要領の改定も、こうした動きと無縁ではあり得なかった。

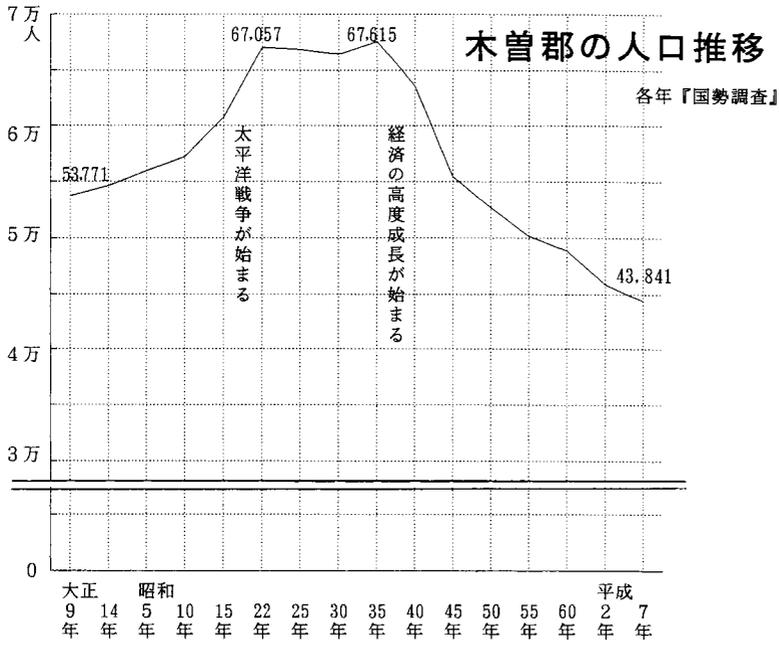
### 二、経済の高度成長と教育

#### 1、東京オリンピックと経済大国

昭和三〇年代から始まっていた経済の成長は、岸内閣の後を受けた池田勇人内閣の所得倍增政策により加速され、我が国は経済の成長率が年平均一〇パーセントを越える高度成長時代に突入した。

昭和三九年（一九六四）の東海道新幹線の開通、そして華やかな東京オリンピックの開催は、まさにそれを象徴するものであった。

図6-1 木曾郡の急激な人口変化

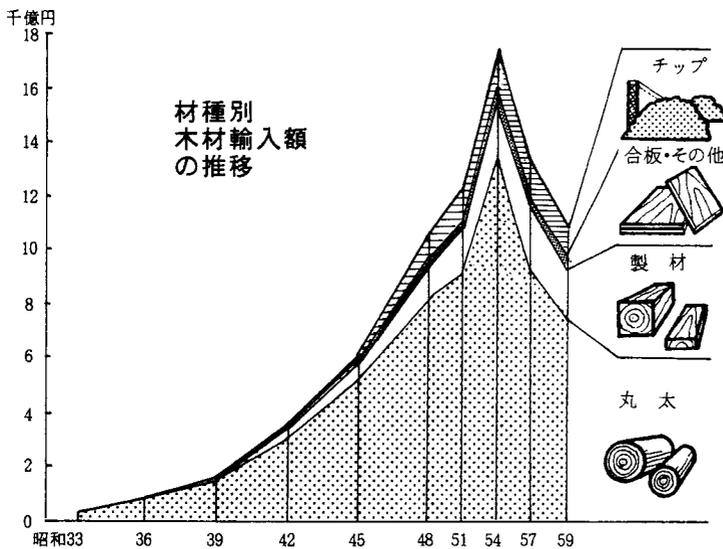


四三年、我が国の国民総生産（GNP）は、資本主義国においてアメリカに次ぎ第二位となり、世界の経済大国としての地位を確立した。

一方、この工業を中心にした高度成長はさまざま矛盾を露呈した。例えば水俣病など各地に公害問題が発生し、深刻な社会

図6-2 材種別木材輸入額の推移

『最新図解 日本の森林・林業』日本林業調査会（昭61）



問題になった。

また都市への人口集中（過密）は多くの農山村地域の過疎化を引き起こすと共に、林業を含む第一次産業の衰退を招く結果となった。木曾郡の急激な過疎化の始まったのもこの時期である。

さらに工業重視の政策は、石炭に代わるエネルギーとして石油を普及させ、いわゆるエネルギー革命が進行した結果、薪炭材の需要も激減していった。

また戦後復興に続く経済成長による木材需要の増加及び価格の高騰は、安価な外材の輸入を促し、ついに昭和三九年には木材関係の全品目が輸入自由化されるに至った。

この結果国内林業は極めて苦しい状況に置かれるようになった。

昭和四八年（一九七三）十月、第四次中東戦争勃発にともない石油輸出国機構（OPEC）は、石油の輸出制限を実施し、さらにその価格を四倍に上げた。

これにより経済大国とはいえ、低価格の石油に支えられてきた我が国経済は大きな打撃を受けた。

このオイルショックは、はからずも日本経済の脆さを露呈した。そして翌四九年の経済成長率は戦後初のマイナスを記録し、高度成長もついに終わりを告げた。

## 2、高校進学率の向上

経済の高度成長は、教育面にも大きく反映され、従来からの教育熱と相まって、特に高校進学率の急激な上昇をみた。

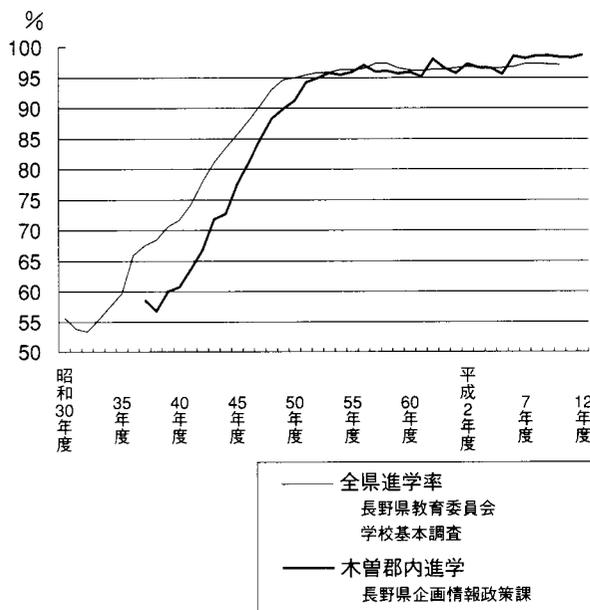
それに伴い、高校教育は従来の少数エリート教育から国民の普通教育化、準義務教育化へと変化していった。

こうした中で、昭和三八年、新高等学校学習指導要領が実施され、多様な生徒の多様な要求に対応できる高校教育のあり方がクローズアップされ、その教育は大きく転換する段階に入った。

郡下でも（注1）、昭和四五年度中学卒業生（四六年入学）の高校（全日制）進学率は六六・〇%であったが、四八年度には、八三・八%、そして五〇年度には九〇・一%となり、定時制や各種学校進学者を加えると九六・七%となった。

（注1）木曾郡中学校卒業生進路状況調査表（元松本教育事務所木曾支所提供）

図6-3 全県と木曾郡内の高校進学率  
（長野県教育委員会「学校基本調査」）



## 三、経済の高度成長と林業政策

経済の高度成長下におけるわが国の林業政策について、「戦後林政史」（大日本山林会）と各年次の『林業白書』をもとに以下、概観してみたい。

## 1、木材価格の独歩高と過剰伐採

終戦後の復興と経済の発展によって、昭和三〇年ごろよりパルプ用材・建築用材等の木材（薪炭用材を除く）需要量が激増した。

その結果、木材価格が他の一般物価とかけ離れた高騰を示し、一般に木材価格の独歩高といわれるまでに至った。

そのため毎年三五万ヘクタールほどの造林が盛んに行われ、まさに林業界は未曾有の活況を呈した。しかし一方、薪炭の生産は石油燃料の進出により急速に減少していった。

このように木材需要の増大は、わが国の森林資源の過剰伐採を行なわせる結果となった。

すなわち、当時の森林で利用可能な面積は約千五百万ヘクタールあり、その立木蓄積は約七億二千万立方メートル、年成長量は約三千万立方メートルであったが、伐採量は成長量を大きく上回る約五千万立方メートルに達していた。

そのため、「数年、このまま伐採が続けば、三〇年生前後の

森林までも伐採しなければならない」と予想された。

## 2、国有林からの木材供給

民有林でも成長量の四倍の過剰伐採が行われ森林資源が急激に減少していった。

このようなことから、将来の木材不足に危機感をもつようになり、それを打開するために、森林資源の四八パーセントを所有する国有林からの木材供給の期待が高まった。

それを受けて、国有林は、三二年に「国有林経営合理化大綱（案）」を発表した。即ち「日本経済の急速な発展に即応できる生産力の増強を打ち出さねばならない」との認識の下に、「国有林が、重要な担い手となって、経営構造を一層近代化的かつ均衡のとれたものとし、木材生産を増強する体制を整える必要がある」ことを表明し、いわゆる国有林生産力増強計画がたてられた。

これは、明治以来の保続生産方式の変更であり、この時期の社会経済状況下ではやむをえない措置であったとはいえ、昭和四〇年以降の国有林経営に暗い影を落とすことになるのである。この増強計画によって、大規模な天然林の伐採とその跡地の人工林化がすすめられたが、一部においては成長不良な造林地が現れる結果となった。

木曾の国有林においても例外ではなく、長野管林局で森林土

壤を研究した林信一（41回・技術士・林業部門）らは、その原因をポドゾル化土壤とササの繁茂による更新阻害をあげている。

また成長量の大きさが植栽樹種選択の基準とされ、そのためカラマツは適木として脚光を浴びることになり、長野県や北海道・東北地方ではカラマツ造林地が著しく広がった。

### 3、農林省の諸政策

農林省は、このような経済発展に対応するために三十五年十月に「林業基本問題とその対策」を発表した。その中で「林業は木材の経済的供給という国民的要請に十分対応していない。木材需要は構造変化を続けながらも増大するから、それに応えなければならぬ」という趣旨が表明され、「林業の企業化と、国有林の増伐可能な経営」を要求した。

木材価格は確かに独走的で、政府は需給の逼迫を緩和し、価格を安定するために三六年二月に「木材価格安定対策」を発表した。

これは国有林の増伐や外材の輸入増加・木材チップの利用促進を骨子とし、同時に拡大造林、林道開発、木材輸入施設の拡充、木材利用合理化を推進するというものであった。

しかし、これも安定につながらず三八年八月に「木材価格安定緊急対策」を発表した。これは、今以上に国有林・民有林の増伐をはかりながら同時に輸入を一層増加させるといふ、外材

に傾斜したものであり、新しい外材時代の到来を示すものであった。

同年に木材関税の完全撤廃によつて、南洋材を中心に外材の輸入は年々増加し、三八年には木材需要の二割を占めるようになった。

### 4、重化学工業の発展と林業

また、三五年ごろから重化学工業の急速な発展は、林業に大きな影響を及ぼすようになった。

まず第一は都市の発達に伴う影響である。住宅用材を中心とする建築用材の需要を拡大させる反面、木材にかわる安い代替品を大量に供給することになり、電柱や杭丸太・足場丸太などの需要が激減することになった。

こうして木材需要量は増大したものの、その用途は製材用材・合板用材・パルプ用材に限られるなど需要構造の変化が現れた。

さらに重化学工業の発展に伴う貿易自由化の影響である。三五年以降における重化学工業製品の市場は海外に移り、三八年にはわが国の輸出額の半分以上を重化学工業製品が占めるようになり、翌三九年からわが国の貿易収支は黒字基調へと変わっていった。

## 5、一次産品の輸入

この重化学工業の発展は、輸出市場を確保するために一次産品の輸入を促進しなければならなくなり、外材もその一つとして輸入が拡大された。

加えてその発展は都市に集中した工場などに大量の労働力が吸収され、山村においては若年労働力を確保することが困難になってきた。

四〇年ごろよりスギやヒノキ等の国産材と競合する米材やソ連材の輸入が急速に増大するようになった。

木材価格は、三六年をピークに横這い状態を示すようになり、従来の上昇基調に対し明らかに変化が見られるようになった。

一方、林業労働賃金は、高度経済成長の下で急騰し、育林労働賃金で見ると外材が進出した三六年から四九年の間に約七倍と上昇した。

このように三〇年代後半より林業を取り巻く状況は厳しさを増し、次第に林業活動は停滞していった。

また、高度経済成長が環境汚染等のひずみを生みその反動のひとつとして自然重視、森林の重要性がかえりみられるようになり、森林の公益的機能を説く論説が多く世に出て社会全体がみどり指向へと急転回した。

## 四、林業振興と山村の活性化

## 1、林業基本法の制定（昭和三九年）

わが国の森林は、国土の六七パーセントを占めながら、木材の経済的な供給という要請に十分応えていないとともに、他産業に比べて所得の格差が顕著になった。そこで、林業の産業としての発展と林業従事者の経済的社会的地位の向上をめざして、林業政策の目標と施策の大綱を定めた林業基本法を昭和三九年に制定した。

この法律は林業が産業として発展することを願うもので、そのためには「生産対策」「構造対策」「流通対策」「従事者対策」の四つの柱をあげている。

中でも、最重要の施策として林業構造改善事業があげられる。これは林業が他産業との所得や生産性の格差が増大している根底には、森林所有規模の零細や生産基盤が整備されていないなどの構造問題があるという認識に立って、それを解決するために機械化や森林の集団化などの林業経営の近代化を推進した。事業は地域（市町村）を単位としてすすめられ、地域の林業振興・発展に大きく貢献した。特に全国的に林道の開設がすすめられた。

木曾福島町においては入会林野の整備事業が進められ、四〇年代後半ごろまでには、県下の事業面積となった。

## 2、山村振興法（昭和四〇年）

昭和四八年ごろまで高度経済成長が続き、前述のように木材需要量は増大の一途をたどったが、国内木材生産量は逆に停滞・縮小し、林業が展開する場である山村地域の衰退が顕著になった。このことから林業振興のためのさまざまな施策の重要性が高まり、さらに山村地域の振興施策が必要になった。こうして、山村地域の経済振興、医療、教育施設など社会文化施設の充実などを内容とする山村振興法が四〇年に公布された。

これに基づいて学校や公民館、診療所などの教育文化及び厚生に関する施設が整備されるなどの山村振興事業が行われた。木曾福島町では、当初新開のみ指定され生活道路が整備された。

また、四一年には新しい国道十九号線が完成し、本格的な車社会が到来した。約一〇年の歳月と工事費百億円余を投じたもので、「心細いよ木曾路の旅は笠に木の葉が舞いかかる」と歌われた木曾路の旅情を一変してしまった。

## 第二節 校舎の全面改築と六〇周年記念事業

### 一、校舎全面改築の大事業

#### 1、校舎の著しい老朽化と伊勢湾台風

大正二年（一九一三）竣工の校舎は、当時はモダンな建物であたが、四〇余年を経て、老朽化が著しくなった。戦時中の工場疎開などが、一層それを早めた。しかし敗戦直後の困窮した状況下では、十分な補修は困難であった。

校舎の各所には支え棒が施され、壁の一部は落ち、窓の木枠はもとより肝心の土台まで腐り始めていた。それに追い討ちをかけるように昭和三四年九月の伊勢湾台風は、建物に大きな被害をもたらした。

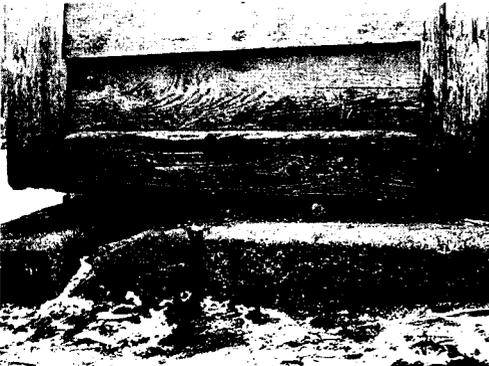
また旧校舎の建築当初は、生徒定員一五〇名を前提にした校舎であったが、その後、本科（林業科）の一学級増、木材工藝科の新設などで生徒の数も三倍の四五〇名に達していた。この間もちろん増築もあったが、それでも文部省の設置基準の六〇パーセントを満たすにすぎないのが実情であった。



写6-2 左側に3寸程かたむいた校舎。  
支えがしてある。



写6-1 老朽化著しい校舎  
土台ならびにスキ、スノコが全部腐  
蝕して、柱が下がっている。



写6-3 土台及び柱の根元が腐蝕して左にか  
たむいている。



写6-4・写6-5

老朽化した校舎に追い討ちをかけるよ  
うに伊勢湾台風が大きな被害をもたらし、  
校舎改築が一層重要な問題となった。



●コラム 田中大工さんのこと

山林高校修繕に携わった 今は無き夫の思い出

田中 か祿

夫（徳一）は大工であり、戦前は地元で仕事が無いため名古屋に出稼ぎに行っていました。戦後は地元で大工仕事をしていましたが、その後は大工の仕事も少なくなっていました。確か、昭和三十年の始めだったと思います。山林高校の修繕を頼まれるようになったと記憶しております。一番の思い出は、昭和三四年九月末の伊勢湾台風だったと思います。家の周りでも屋根のとんだ家もありましたが、山林高校の校舎の屋根瓦が飛んで大きな被害があり、夫は瓦職人と共に修理にあたっていました。破損した瓦の片付けに、私も近所の方をお願いして行った思い出があります。その時は小使さんの部屋で昼食の弁当を食べさせていただいた思い出があります。その後山

林高校は改築工事が進み、学校の修繕の仕事は少なくなりましたが、教員宿舍の修繕や、木曽西校、木曽東校、福島小学校の修繕を頼まれるようになりました。私は義父が毎日日記をつけているのを見ていて、昭和三十年頃より私も日記をつけるようになりました。夫の仕事に行った先を全て書いておくのも日課になっていましたので、大体の仕事先や内容はわかっていました。職人だった夫は、口数もあまり多くありませんでしたが、山林高校は先生も、事務の方も良い人ばかりだとよく話していました。昭和五年、小学校の仕事に亡くなりましたが、亡き夫も大工仕事の大半を学校修繕に携われたことをきくと喜んでいました。私も、高齢となり代筆を頼むようになりましたが、今後とも山林高校が益々御発展されるよう御祈念申し上げます。

（平成十三年三月末日）

2、校舎の全面改築へ向けて

校舎の老朽化を憂える声は、敗戦直後からあり毎年校舎の補強改修が行われ、昭和二六年には講堂の改築などが行われたが、

これらは応急処置的なもので抜本的な解決ではなかった。こうした中、創立六〇周年記念を控えた昭和三十一年頃、期せずして関係方面から「校舎を全面的に改築しよう」という声がおこり、三十三年十二月六日「長野県木曾山林高等学校改築期成

同盟会」が挙郡一致で結成された。

主な役員は次の通りである。

会長 中村治郎（16回 長野県議会議員・蘇門会長）

副会長 佐藤誠一（16回 福島町長）

副会長 黒田三郎（22回 新開村長）

副会長 古幡三良（PTA会長）

副会長 遠山一郎（上松町長・郡町村会長）

その初会議で、次の三件が決定された。

① 全面改築をすること

② 現在地では敷地面積が足りないので、適当な場所へ移転したい。

③ 十二月長野県議会へ陳情する。

県財政不如意の中、県議会・県教育委員会に対して陳情、請願を重ねた結果、県議会から次の回答が寄せられた。

昭和三四年三月二二日

長野県議会議長 風間和夫

請願人 西筑摩郡町村会長 遠山一郎 他 四名 殿

請願の採択について（通知）

かねて当議会に提出されました左記の請願は、願意の大体は妥当と認められ、採択を決定いたしましたのでご承知下さい。

記

一、請第三一号 木曾山林高校校舎の改築について

そして昭和三五年（一九六〇）三月、長野県議会において「向う三ヶ年継続事業として校舎の全面改築」のための予算が可決された。

こうして本校の全面改築が決定した、しかしこの改築にあたっては、総額一億円の内、二千万円を地元が負担するものであった。改築期同盟会では、それを次のように分担目標を決め、蘇門会員や地元及び学校関係者などに趣意書を送って理解、協力を求めた。

校舎改築総工費 一億円

右の内 地元負担金 二千万円

内訳 蘇門会負担金目標額 七五〇万円

PTA 〃 二五〇万円

町村会其他 〃 一千万円

蘇門会は組織を挙げて協力態勢を固め、全国の支部に檄を送って、卒業生（在校生も含む）一人五千円以上の寄付を懇請した。特に永年にわたって教鞭をとり、広く卒業生に慕われていた神庭英先生が、関西から北海道の各支部を回って協力をお願いした。またPTAでも、毎月一人一〇〇〇円の寄付金積立を始めた。

### 3、校地の選定と誘致合戦にゆれた木曾谷

「現在地では狭いので適当な場所へ移転したい」という期成同盟会の考えに対して、当初有力候補地として日義村があがった。しかし上松町からも誘致の手があがり、又、現在地でも校地拡張が可能という声も出て、候補地をめぐって激しい三つ巴の論戦が展開される事態となった。

こうした中で福島町は、誘致合戦を有利に導くために地元負担金を全額引き受けることを明言した。そしてその資金を得るために同町所有の本校演習林を県林務部に売却した。この結果本校演習林は、以後県有林となった。

こうした様々な紆余曲折を経て、同年六月十日、西筑摩郡定例町村会で「現地改築」に落着し、地元福島町と新開村では県道より下の民有地を買収整地をして新校舎建設に対応することとなった。

写6-6 激しい誘致合戦を報じた新聞各紙

### 1959.11.27 中日 移転派と拡張派が対立 木曾山林高校の改築で

木曾山林高校の改築問題が、移転派と拡張派の対立を激化させている。移転派は、現在の敷地が狭小で、拡張は不可能と主張している。一方、拡張派は、敷地を拡張して、現在の敷地に建て直すことを主張している。この対立は、学校の存続と発展の将来を左右する重要な問題となっている。

### 1959.12.7 信毎 三カ所で誘致よびかけ 木曾山林「移転」現存で争う 高の改築

木曾山林高校の改築問題が、三カ所で誘致よびかけが行われている。高の改築は、現在の敷地に建て直すことを主張している。一方、移転派は、現在の敷地が狭小で、拡張は不可能と主張している。この対立は、学校の存続と発展の将来を左右する重要な問題となっている。

### 1960.3.7 中日 現地改築推進する 福島町で署名運動

福島町で署名運動が行われ、現地改築を推進する声が高まっている。署名運動は、町民の多くが参加し、現地改築を支持する意思を示している。これは、学校の存続と発展の将来を左右する重要な問題となっている。

### 1959.12.5 信毎 木曾山林高校の奪いあい 政治かけ引激化！ (福島新開)(上松)(日義)三ツ巴戦か

木曾山林高校の改築問題が、政治的な駆け引きを激化させている。福島新開、上松、日義の三ツ巴戦が、学校の存続と発展の将来を左右する重要な問題となっている。

### 1959.12.19 信毎 木曾山校高校の奪い合い 意気込み凄々狩戸案 飽まで正沢高原を強調

木曾山校高校の改築問題が、意気込み凄々な狩戸案と、飽まで正沢高原を強調する動きが見られる。これは、学校の存続と発展の将来を左右する重要な問題となっている。

### 1960.2.20 信毎 木曾山林高校の敷地は 上松町に決定す

木曾山林高校の敷地が、上松町に決定した。これは、学校の存続と発展の将来を左右する重要な問題となっている。

### 1960.2.27 信毎 西筑町村会の決定に 飽まで不満の福島町 めの手この手で撤回運動

西筑町村会の決定に、飽まで不満の福島町で撤回運動が行われている。これは、学校の存続と発展の将来を左右する重要な問題となっている。

### 1960.3.1 信毎 黒田新開村長が辞表 山林高 移転問題の責任とる

黒田新開村長が辞表を出し、山林高の移転問題の責任を認めている。これは、学校の存続と発展の将来を左右する重要な問題となっている。

### 1960.3.5 信毎 地主十八人招き、 移築の経過報告 上松町側の暗対策

地主十八人を招き、移築の経過報告が行われた。上松町側の暗対策も明らかになった。これは、学校の存続と発展の将来を左右する重要な問題となっている。

### 1960.3.19 信毎 意気込み凄々狩戸案 飽まで正沢高原を強調

意気込み凄々な狩戸案と、飽まで正沢高原を強調する動きが見られる。これは、学校の存続と発展の将来を左右する重要な問題となっている。

#### 4、新校舎建設の植音高く

昭和三十五年十二月四日起工式が行われた。工事は吉川建設株式会社が請負い、第一期工事（昭和35年度分）の本館棟建設工事が始まった。



写6-7 中村治郎改築期成同盟会長(16回)の鍬入れ

この工事に先立って十一月から整地作業が始められ、永い間親しんできた、想い出深い見本園（防風林）や苗圃は、全て削られて平地となり、県道から正門までの通いなれた道も姿を消した。

この大工事は、次のように三期に分けて行われた。

(1) 第一期工事（昭和三五年度分）工費 三三六〇万円

本館棟

工期 昭和三十五年十二月四日～三十六年一〇月末

鉄筋コンクリート造三階建 総床面積一九一六㎡

（建物内部）

一階 生物教室・同準備室・木材試験室・

普通教室三室・生徒会室・写真暗室

二階 化学教室・同準備室・普通教室三室・製図室

三階 物理教室・同準備室・第三研究室（国語・社会・

英語等）・社会科教室・普通教室三室

屋上 一部屋上広場

(2) 第二期工事（昭和三六年度分）工費 五三一二万四千元

管理棟

工期 昭和三十六年一〇月～三十七年七月

鉄筋コンクリート造一部二階・一部三階建

総床面積一〇三七・五㎡

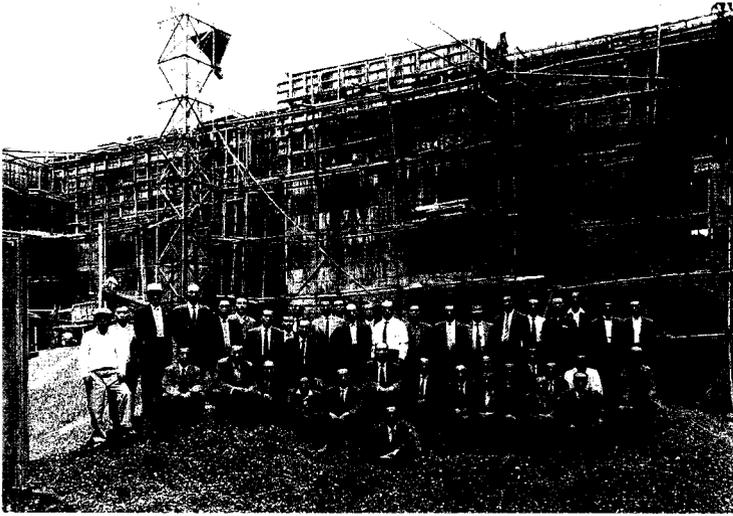
（建物内部）

一階 昇降口・ボイラー室・浴室・水呑場

二階 教務室・校長室・事務室・保健室・宿直室・

公仕室

三階 図書館・司書室・応接室・放送室（録音室併設）



写6-8 工事中の本館棟をバックに、期成同盟会・蘇門会総会の参加者達 (昭35・6・20)

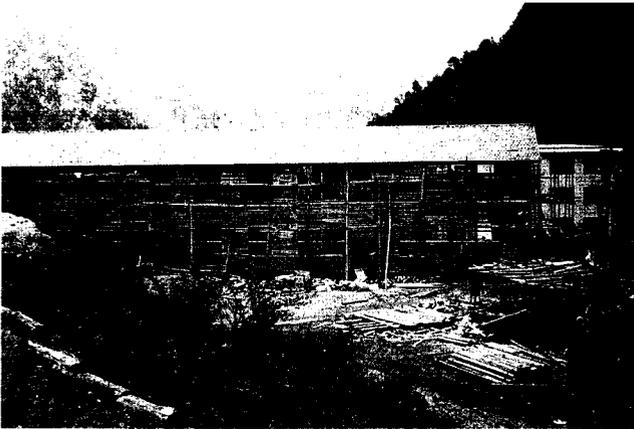
(建物内部)

工期 昭和三十七年二月～同年九月  
木造二階建瓦葺造 総床面積七二七・三㎡

林業棟

本館と管理棟を結ぶ二本の渡り廊下

・第二研究室・会議室



写6-9 林業棟工事 昭和37年4月ころ  
右後ろの山は第7林班

工期 昭和三十七年二月～三十八年六月

農具室(林業棟付属建物)

・他に工芸科標本製品陳列室が同居

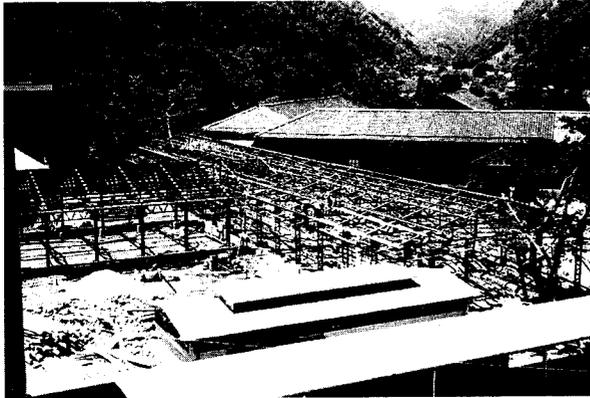
・林業科標本室

二階 林業科管理室・林業科宿直室・測量器械室

・生産器具室・林業器具機械室

林業第二実験室(木材加工)・同準備室

一階 林業第一実験室(林産製造室)・同準備室



写6-10 工芸棟（中央鉄骨部分）工事（昭和37年8月ころ）奥に見えるのが旧校舎

木造平屋建 総床面積一二三・七㎡

（建物内部）

学年別農具室三室（更衣室）

共用農具室・収納室

工芸棟

工期 昭和三七年二月～同年一〇月

鉄筋造平屋建

総床面積九〇六・二㎡ 最大スパン約十二m（六間半）

（建物内部）

工芸科管理室・製品並びに更衣室・上塗室・下塗室・組

立室・工具室・第一機械工場・第二機械工場・資材室

木材乾燥室及び漆工室（工芸棟付属建物）

完工 昭和三八年4月

木造平屋建 総床面積八一・六㎡

（建物内部）

一階 木材乾燥室（ヒルデブランド一基設置）

漆工室・宿直室

(3) 第三期工事（昭和三七年度分）工費 五四九四・四万円

体育館

工期 昭和三七年九月～三八年六月

下屋 鉄筋コンクリート造、上屋 鉄骨造

二五・二×三二・四m 床面積 八一六・五㎡

周囲の中二階に観覧用のギャラリを廻らす。

バスケットコートが二面可能な床面積の他に、種々の体

育施設を設けた。

寄宿舎（望岳寮）

工期 昭和三七年十二月～三八年八月

三棟 内一棟二階建 総床面積一〇三三・七㎡

（建物内部）

南棟 四人用室二十室・舎係室・玄関・予備室・階段室

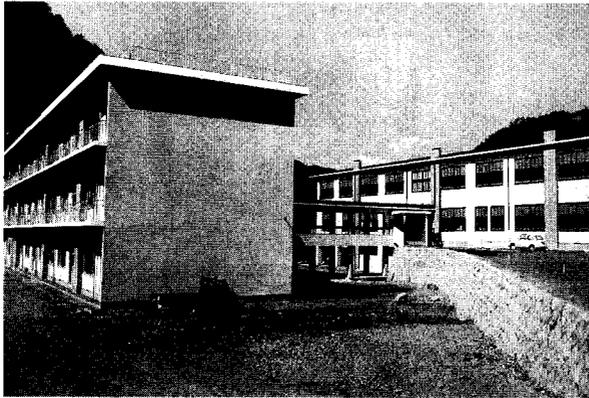
中央棟 浴室・洗面室・ボイラー室

北棟 食堂・炊事室・炊婦室



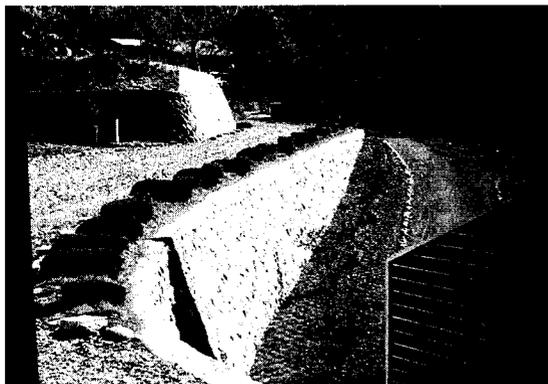
写6-11 完成した寄宿舎（望岳寮）

（高校の寮としては、ボイラーを取入れる等、県下最大・最新設備を誇るものとなった）  
また、この間職員便所・生徒便所がつくられた。  
さらに、第一期工事と並行して県道下の民有地も買収し、整地が進められた。一方、昭和三七年PTA寄贈資金約二十万円で、佐々木教諭の指導による、生徒達の労力奉仕によって、造庭工事が進められ、落成式の頃には前庭・中庭・南庭もほぼ完成した。



写6-12 完成した本館と管理棟、木曾谷一のモダンな建物と言われた

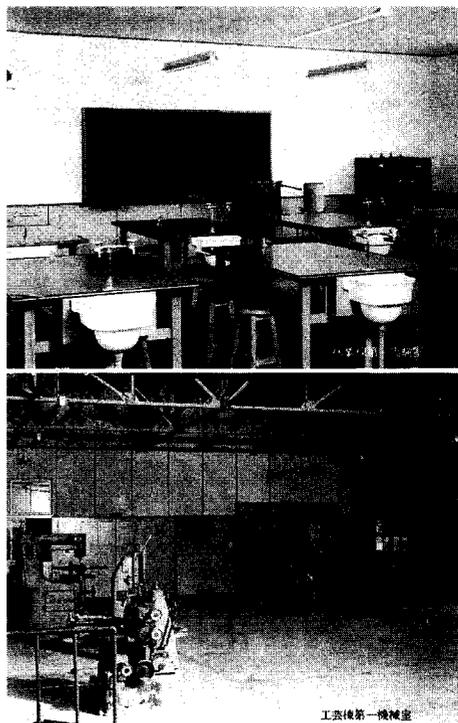
こうして昭和三五年（一九六〇）から、足掛け四年の歳月をかけた全面改築工事は終わった。その経費は当初の見込みを大きく上回って一億四四六万八千円の巨費にのぼり、新たな地元負担も強いられたが、それも乗り切った。  
このような校内すべての建物の一新かつ施設設備の充実は、本校の新たな発展を象徴した。



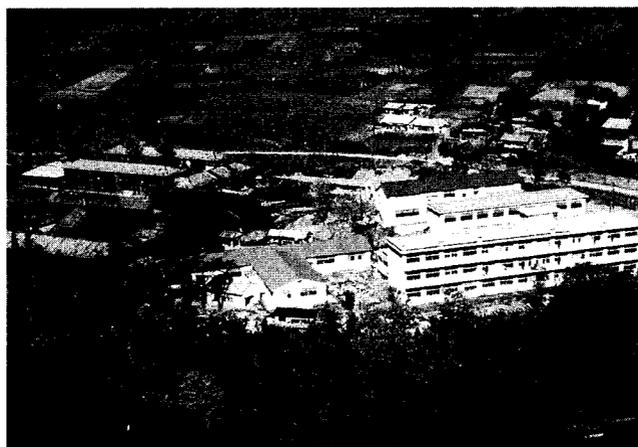
写 6-14



写 6-15 PTAが資金を寄付、生徒達の労力により成った校庭(上)と石庭(下)



写 6-13 完成した林業第一実験室と工芸棟  
機械実習室 (60周年記念絵葉書)



写 6-16 昭和37年(1962)10月ころ

新校舎と旧校舎の位置比較

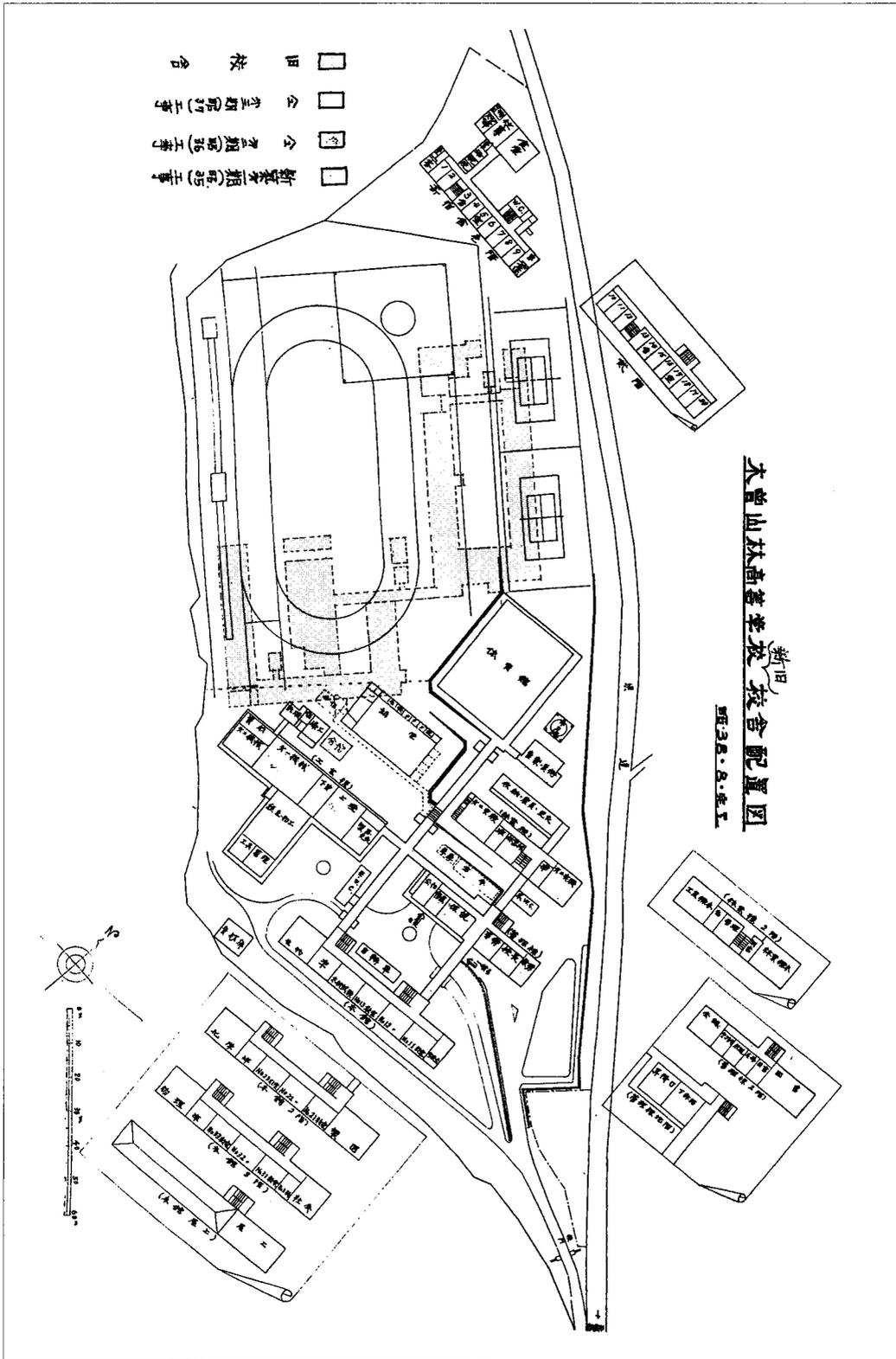


図6-4 木曾山林高校 新・旧校舎配置図

## 二、創立六〇周年記念の喜び

### 1、創立六〇周年記念式典

「創立六〇周年記念事業実行委員会」によって計画された記念式典は、校舎の落成をまっけて、二年後の昭和三八年（一九六三）十月二十日に挙行された。



写6-17 新体育館での盛大な60周年記念式典

当日参集した来賓、卒業生、父母は合わせて千人を越え、創立以来の大盛典となった。式典は福島商工会で打ち上げた花火と共に、午前十一時体育館で厳粛裏に始まった。

中村治郎会長の式辞に続いて上條善昌校長の挨拶、事業経過報告、建築功労者への感謝状、永年勤続職員の表彰、藤巻県教育委員長の祝辞、生徒代表謝辞と進み、最後に全員の校歌大合唱で終わった。

続いて記念写真（第六章扉）を撮影した後、体育館で大祝宴が開催された。この日は福島町も祝賀気分が満ち溢れた。駅前



写6-18 木曾福島駅前にかかげられた祝賀の横断幕  
(下島万夫教頭撮影)

には横断幕が張られ(写6-18)、商店街は祝賀ピラで飾られて「木曾総合物産展」も催された。

また、生徒会では校舎竣工と六〇周年記念に併せて、十月十八～二十日にかけて「ひのき祭」を開催した。盛大で充実した内容は、記念式典を飾るにふさわしいものであった。

上條善昌校長は、こうした校舎全面改築と六〇周年記念式典の意義を式辞の中で次のように述べた。

記念式典を迎えて

学校長 上條 善昌

この度校舎の改築工事が立派に完成して、落成式を挙げると共に、意義深い創立六〇周年の記念式典をあわせて行うことのできるのはまことに感慨深いものを覚えます。

以前より校舎の老朽化と狭あいによって、生徒の活動にも不便をしていましたので、蘇門会、PTAを始め、地域の方々の協力により県へお願いしたところ、当局のご理解によって、去る昭和三十五年三月、県議会において、校舎の全面改築が議決されました。

そして同年十二月には地鎮祭に続いて第一期工事の本館建設がはじまり、第二期工事の管理棟、林業棟、工芸棟、第三期工事の体育館、寄宿舎と順調に進められました。

工事が進むにつれ教室は勿論、校庭にいたるまで雑音や資材の置場などで大変なものでした。県道から玄関までの通路

は何回となく変更され、時には中断せざるを得なくなった事さえあります。

旧校舎建設当時から大事に使い、都合のよかった庭球コートや台風災害後、立て直したばかりの相撲場なども遂に使用不能に陥ったり、取り壊しを余儀なくされたのもこの頃です。

このように一時は想像以上の不便不自由をしましたが、生徒諸君はやがて完成の暁を夢みながら希望にもえてよくこの不便をしのいでくれました。

更にその上、事業の進捗に当ってあれこれと協力を惜しまなかつたことは、生徒として当然のことかもしれませんが、嬉しいことの一つでした。

お陰で事故もなく、今年八月校庭の拡張を残して、予定の施設が立派に完成したわけで、お互いに感激ひとしお深いものがあります。

工事中工以来四カ年の長い期間でありましたが、この間に寄せられた、学校にゆかりのある方々の物心両面にわたるご協力は、並大抵のものではありませんでした。

私共は工事の完成をみた今日、ここに改めて、これらの方々に対し深甚なる感謝の誠をささげると共に、今後ご期待に添うようこの立派な校舎を充実活用し、できるだけ愛護していきたいと思います。

現在取り壊しつつある旧校舎は、大正元年に建てられたもので、当時としては人目をひく見事なものであったことと思

います。

それから五十余年を經過して今では腐朽の場所さえ見受けられますが、卒業生の大部分の方は懐かしい巢立ちの場所であの古風な玄関から暗い教室、さては今想像もつかない狭い急傾斜の階段、又、山林学校七不思議の一つとかの天井など、一つ一つがその頃の想い出に結びついて尽きないものがあります。

明治三十四年創立当時は、今の福島小学校のところにあった、当時の西筑摩郡高等小学校の校舎を一部仮校舎として使っておったことですが、そのころの卒業生の方々からすれば、その後のいろいろの移り変わりからして本当に感慨無量のものがあるかと推察いたします。

六十余年前、この地に林業教育の必要を叫び、当時の経済恐慌を押し切って本校の創設にご努力、ご苦心なされました先覚者各位のことを想い浮かべると、全く頭の下がるものを感じます。

それより時移り人変わり六十年の歲月は流れ去りました。そして学校の組織や姿こそ変わりましたが、そこに流れる山林学校の尊い精神は脈々と受け継がれ、益々発展強固となっております。これは一に卒業生各位のご尽力の賜物と感謝しています。

この度記念式典を挙げるに当り、私共は徒らに古きものに酔うことなく、静かに六十余年の校歴にさかのぼって先

輩各位の積まれた尊い業績をしのび、そこから将来にわたって一大飛躍をする決意を新たにしていきたいものです。

## 2、蘇門林の設置

六〇周年記念事業の一環として「蘇門林」が造成された。新開村黒川細尾五九九五番地にある八・五ヘクタールの橋詰地区の区有林を借りて蘇門会（学校）六分、地区四分の分収契約を結び蘇門林とした。そこで雑木の伐採、地拵えを行い、昭和四一年（一九六六）春に第一回植林を実施した。以降三カ年で、ヒノキ、アカマツ、カラマツを植栽した。地拵えまでの作業は生徒の手によって進め、植栽には蘇門会長以下会員多数が参加して、職員、生徒共に一体となって汗を流した。

この事業は、当時蘇門会副会長だった黒田三郎（22回）の格別の尽力によって実現したものであった。蘇門林設置については、昭和十七年（一九四二）一月の蘇門会総会で二〇〇三〇ヘクタールを十カ年で造成するとの構想が決定されたが、大戦最中の諸事情から実現に至らなかった経緯があった。

卒業生の、母校を思い山を愛する不滅の精神が四分の一世紀を過ぎて実を結んだものといえよう。



写6-19 蘇門林での植樹スナップ



写6-20 蘇門会役員と本校職員

### 3、記念誌『六十年の歩み』発刊とスライド等の作成

昭和三九年三月、創立六十周年記念事業の一環として記念誌『六十年の歩み』が発刊された。

その内容は、四カ年の歳月と一億四千万円余の巨費によって完成した校舎全面改築工事の経過と記念式典を詳細に記述すると共に、明治・大正・昭和の三代にわたる本校の歴史を一二〇ページに要約したもので、一冊の本になったものは開校以来はじめてであった。この編纂は、ひとえに泉万珠男教諭（国語科）の尽力の賜物であり、的確、簡潔に六十年の歴史をまとめたすぐれた冊子である。今回一〇〇周年誌編纂に当って、大きな資料となったのは申すまでもない。

本校一〇〇年史中、最大の建設事業である校舎全面改築の経



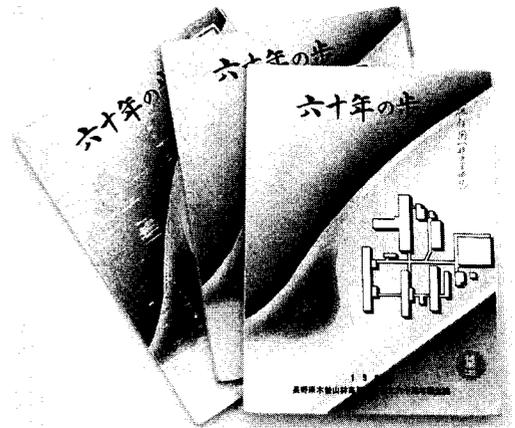
写6-21 蘇門林に建てられた標識  
奥原万喜男教諭（左）と鷹野貞雄校長

過は、下島万夫教頭によって克明に撮影、編集された全五冊のアルバムにまとめられている。

前掲した写真や新聞記事の大部分はこのアルバムから活用させていただいた。これらは、いずれも貴重な資料となった。

それと同時に、これらの記録を見るとその当時の職員・生徒・関係者の全面改築に対する大きな喜びと期待が満ちあふれていることを感ぜずにはいられない。

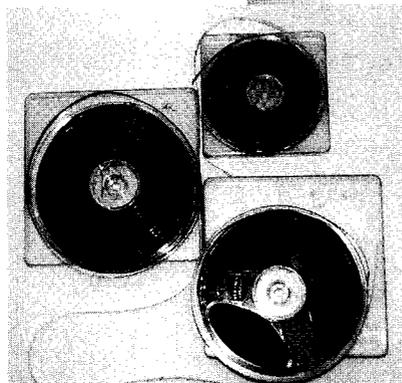
また、下島教頭は前述した改築の記録に加えて、六十年の歩みを映像（スライド）化及び8ミリフィルムに収めて、変わっていく本校の姿を永久に保存する労をとられた。二度と入手できぬ貴重な資料として本校に保存されている。



写6-22 『六十年の歩み』  
(題字は上條善昌校長、表紙デザインは白金茂教諭)



写6-23 改築の記録(左)と山  
林学園六十年史のスライド、録音テープ



写6-24 8村上氏撮影の8ミリフィルム

さらに校舎改築の様子は村上正光氏によって当時最新の8ミリフィルムにも収録された。村上氏は、当時新開村幸沢地籍においてマンガンの採掘事業をしていた頃より古川彦次教諭とは面識もあり撮影の依頼を受けた。

昭和三七〜三八年頃にかけて工事の進捗状況を鉾山の現場に通う往復路に立ち寄り撮影された。

当時はコンクリートの打ち込みは現在のようにポンプが無いので全て足場を組み一輪車を使い打ち込み作業をしていた。

従って足場も悪く危険でカメラを落とし買い替えたこともあった。当時のカメラは自動機能も無く勘に頼る部分もかなり有った。撮ったフィルムは本校に寄贈（写真）。ただし編集が

●コラム 蘇門会員のきずなと喜び

校舎の全面改築と創立六〇周年記念式典は、全国に散った蘇門会員すべての喜びでもあった。

当日式典に参加した奥山嘉計（45回）と坂本恭二（同）は、中津川市に帰った時、偶然にも前述園原咲也（1回・沖縄在住）の従兄妹である尾関千恵さんに出会った。そんなことがきっかけで二人は、記念品の中にあつた新校舎の絵葉書と彼らのメモを沖縄の園原に送るよう尾関さんに託すことになった。それらを受け取った園原が喜んだことは想像に難くない、彼はその絵葉書と奥山等のメモを自分のアルバムに収めて生涯大事にした。式典に参加できなかった卒業生も多いが、こうして蘇門のきずなを深め、母校の発展を我がことのように喜んだのである。

未完成であるので永く保存するようであればVTRにダビングしたほうが良いかと思われる、とのことである。

村上氏はその採掘が終わった後、木曾駒高原開発（木曾駒ゴルフ場）の支配人小野辰三（21回）に管理職として招かれ六三歳まで勤めた。この間ゴルフ場創業時の整地作業から開業後の四季折々の情景や皇族が来訪された折にも八ミリに撮ったという。



写6-25 園原のアルバムに収められた母校の絵葉書と奥山・坂本のメモ (園原繁氏蔵)

## 第三節 教育体制の改革とコース制の設置

昭和三五年（一九六〇）、文部省は「高等学校学習指導要領」を告示した。その骨子は従来の高校教育を大きく変えるもので大略次のようであった。

- ① 小中高校教育に一貫性を持たせると共に必修科目の増加やコース制の採用をすすめる。
- ② 社会の進歩や要請に即応する。
- ③ 生徒の能力・適性・進路に応じた教育を行う。
- ④ 道徳教育の充実強化。
- ⑤ 基礎学力の向上、科学技術教育の充実。

以上の趣旨をふまえて、昭和三八年度入学生より学年進行で実施するものであった。一方、本県の高校進学率は告示の年に五六・六％であったものが、実施年には六四・七％と急速に高まり、それと共に生徒の多様化も進んだ。

### 一、工芸科の改革

#### 1、木材工芸科の改称とコース制の導入

昭和三八年（一九六三）四月、学習指導要領の実施に沿って、従来の木材工芸科を「工芸科」と改称した。同時に、デザイン・

加工の二コースを設けて、二学年よりコース別履修を実施することとし、女子の入学を認める画期的な改革をはかった。各コースのねらいと教育課程は、次の通りである。

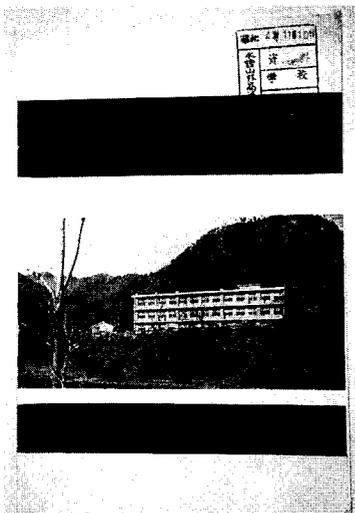
#### ① 加工コース

木材加工はもちろん、プラスチック、ガラス、金属等の生産工業、家具、車輛、造船等その他の加工工業面への就職に対応できる人材を育成しようとするものである。

#### ② デザインコース

工芸品その他の意匠設計をするための基礎を習得し、近年要望の強いドラフトマン・デザイナー等への人材を育成しようとするもので、新しい進路として「女性」の進出を要望し、期待する。

『工芸科のしおり』



写6-26 工芸科の改革を広くPRした『工芸科のしおり』

図6-5 工芸科の教科と単位表

教科	科目	加工コース	デザインコース
国語	現代国語	7	7
	古典 甲	2	2
社会	倫理社会	2	2
	政治経済	2	2
	日本史A 世界史A	3	3
	地理 A	3	3
数学	数学 I	5	5
	応用数学	6	6
理科	物理 A	5	3
	化学 A	4	3
	生物	0	3
保健体育	保健	2	2
	体育	7	7
芸術	音楽	2	2
外国語	英語 A	9	9
工業	工芸実習	17	13
	工芸製図	7	11
	工芸史	2	2
	工芸材料	3	3
	工芸工作	3	3
	塗装	3	3
	材料力学	3	
	機械電気	3	
	工業経営	2	
	絵画		2
	造型		4
	工芸計画		2
合計		102	102

これにより木材加工はもちろんプラスチックやガラス・金属等の加工や意匠設計等、斬新的に教育分野が広がり、工芸科は大きな発展が期待された。

2、初めての女子生徒入学

戦後、教育改革の大きな柱である「男女共学」は、工芸科のデザインコースの設置により、本校でも実現した。そして開校

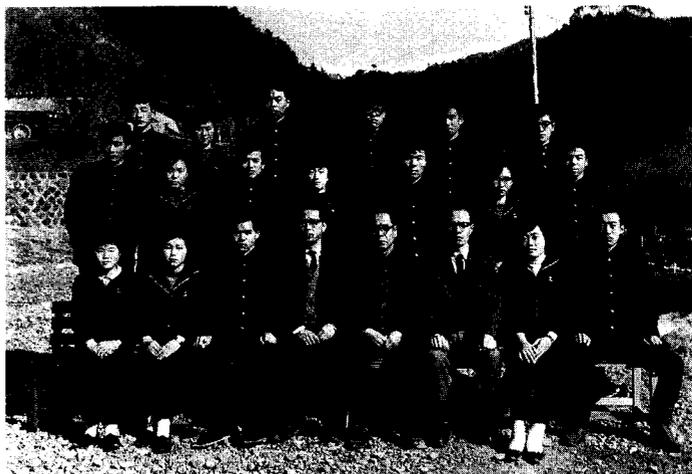
以来初めての女子生徒が、昭和三八年四月、同コースに七名入学し、校内に新風を吹き込んだ。

入学した小澤恵子は、その当時のことを次のように回想する。

高校生活とその後

六三回 小澤（大戸）恵子  
創立百周年を迎えますこと、お目出とうございます。

昭和三八年、男子校でありました木曾山林高校に、女子が入



写6-27 7名の女子 デザインコースの仲間と共に

学できることになりました。

私自身は思ってもいなかったことでしたが、中学校時代の恩師に勧められて、受験することになりました。女子を何名とるかもわかりませんでした。当時、九名受験し、七名合格して入りました。そして、四月いよいよ工芸科に女子の第一期生が入学したのでした。

#### 女子入学と戸惑い

学校側も、われわれ七名も、男子の同級生、上級生も戸惑うことばかりでした。まず、女子用のお手洗いがなく、職員便所を使う事、ロッカー室は、保健室の隣りの部屋で、着替え室も兼ねていました。

あのころの上級生の中には、ほんとうに勉強をしたくて、働いてお金を貯めて入学している人達もいました。年齢が四才や五才上の人もいておじさんに見えました。

そして、当時の上級生は絶対的なものがありました。下級生はそれに従うのが当たり前でした。そんな中、学校には色々な行事もたくさんありました。

#### 春四月 応援練習

春四月、第一関門は運動クラブの応援をするための応援歌の練習です。大きな校庭のまん中に立ち、左手は腰へ、右手は高く大きく振る、大声で歌う、この練習は大変なことでした。

毎日放課後やらされて女子だからと甘くはなく、学校の伝統となっていました。その上、三年C組だった工芸科の上級生に、我々のクラス一年C組全員が教室へ呼びだされ「お前達のクラスは女子が入学してたるんでいる」と、ハッパをかけられました。

今でいいますと「活をいれる」という事です。机を三段重ねてその上から見おろす人、棒を持ってうろうろと歩き回る人、ニヤニヤと笑っている人とさまざまでした。本当に怖い時間で

した。

こんな場面は当り前でした。上級生から下級生への挨拶がわりみたいなことでした。我々は、上級生になっても下級生に「ハッパをかけるのはやめよう」と、話し合ったことを思い出します。

しかし三年生になった時はどうだったのでしょうか？今の時代なら大変なことで、すぐ大騒ぎになるでしょう。

夏 水泳

そして夏。第二関門は体育授業の水泳です。黒川ダムの上流の橋の上からの飛込みとクラスマッチでした。今思えばダムの水も綺麗で、泳ぐことができたのです。

三五年過ぎた現在では、とても考えられないことだと思いません。

秋そして冬

秋。第三関門は運動会でした。男子女子混ざっての二百m疾走と棒倒し、騎馬戦です。騎馬の上には女子も乗って戦ったのです。

冬になりますと、第四関門というより黒川ダムでのスケートです。あの大きなダム一面に氷が張り、やはりクラスマッチがありました。早朝から練習もでき、授業の一貫としてやりました。

私も、中学生までは父の作ってくれた下駄スケートでした。

そのとき初めて皮のスケート靴を買ってもらったことを思い出

します。

こうして書いていきますと、学校がいかに自然環境の良い、素晴らしい場所に建設されていたかというのを改めて思い起こされます。

二年デザインコースに進む

無事、一年間を終え二年生に進級するとき、工芸科の中で加工コースとデザインコースに分かれました。

女子はデザインコースに進み、授業の内容はデザイン的な事に集中しました。

美術的センスを磨き、又他ではサイドボード、座卓、こたつ板、木箱なども、先生や男子同級生に手伝ってもらいながら完成し、いまだにとつてあります。

三年進路決定と卒業

そして就職の時期になりました。その頃は世の中が高度経済成長期に入り、また山林高校で第一期入学の女子が卒業するということで、あちらこちらの企業から募集がありました。

今の時代では考えられないほどひっぱりだこでした。一人に對して何社、何十社というほど就職する所がありました。

そんな折、私も建築関係の会社に勤めることになり、設計室に配属となりました。二級建築士を目指して頑張っていました。結婚することになり退職しました。

たまたま結婚した相手が数年後に一級建築士の資格を取りました。

## 子育てと草月流のいけ花

その後、私は子供を育てながら草月流のいけ花を習うようにしました。

この流派の考え方は、いけ花は常に生きている。固定化したり定式化してしまったものは何もない。いつも現代を生きる感覚がいきいきと脈うっている、創造の空間。植物を使ってそんな世界を追求している集団でした。

花をいけるだけではなく、いける作品のデッサンをしたり、壁にかける「植物を使ったレリーフ」、レリーフとは浮き彫りのことです。「異質素材と生の植物」、金属、石、紙などを使って植物との融和。「平面分割とその立体化」リズムやバランス、着色した結果。「カラージュ」写真や絵や文字などを切り抜き、これを画用紙などに貼り、ユーモラスで謎めいたものを組み合わせさせて表現します。

「デカルコマニー」は、転写などと訳されている美術上の表現方法とされています。

自分のアイデアを大切にし、これを育て作品に反映させ、人間の創造力による美を作っていく作品空間を構成し、その作品で空間を演出します。

草月流では今「フラワー」と、よぶ仕事を進めています。

「フラワー」を使った「ワーク」で現代の様々な空間に植物の精気を吹き込み、それを変貌させる仕事です。

流行をアピールするウィンドディスプレイから、壮大なス

ケールのイベント空間の演出まで、草月の花のステージは今もどんどん広がっているのです。

この世界に今の私が職業としてやっていけるのは、山林高校時代に工芸科、デザインコースなどで学んだ事が身につけていて、現在すぐく役にたっていると思っています。

草月のいけ花は広さも深さも無限です。これからでもできるかぎり上京しながら勉強を重ねていくつもりです。自己を高めることが、ものづくりの原点であると思います。

幸い良い家族に恵まれて、草月流の世界を少しづつ理解してもらい、いけ花とはなにかわかってもらえるようになりました。今再び母校を思う

山林高校を卒業したことによって、私の人生に大きな支えと大きなものを残しました。「七人の侍」と言っ先生方に可愛がっていただき、その上色々な事を指導していただき、三十数年たつ今でも感謝しております。

百周年を迎える学校を卒業した事に、誇りと幸福を感じています。木曾山林高校が永遠に残りますように心からお祈りいたします。

(了)



7人の女子は当時「七人の侍」と言われ、新風の旗手であった。組立（上・写6-28）造形（下・写6-29）の実習風景  
『第18回卒業アルバム』

## 二、林業科の改革、コース制の導入

工芸科に続き林業科でも、県下の各林業科に先駆けて昭和四二年（一九六七）四月入学生から、林業経営コース、林産コース、土木コースの三コース制の導入に踏み切った。

その狙いは、産業界の進展に対応し、また生徒がコースを選択することで一層教育効果を高め、中堅技術者としての先進的な専門知識・技術の深化を図ることであった。

実際に四〇年の卒業生は、林業経営に関する分野へ約三三

パーセント、林産に関する分野へ約三五パーセント、土木に関する分野へ二四パーセント進出しており、これらの実態をふまえて二年より、生徒を経営・土木・林産の三コースに分化する教育課程を編成した。

各コースのねらいと教育課程は次の通りである。

### ① 経営コース

育林、森林経理・法規、伐木運材に重点をおき、営林局署、県林務部、育林種苗会社、木材生産会社等に就職するために必要な知識技術の習得に主眼をおく。

### ② 土木コース

測量、土木設計、土木施工に重点をおき、森林土木、測量、建設会社等への就職に必要な知識技術の習得に主眼をおく。

### ③ 林産コース

木材加工、林産製造、工業経営、計算実務等に重点をおき、パルプ製紙会社、合板ハードボード関係会社、木材問屋等への就職のために必要な知識技術の習得に主眼をおく。

『木曾山林高校新聞』61号・昭42

## 三、実験・実習の充実

この時期、高校進学率は急速に高まり、ほとんどの中学生が高校進学を希望して、「高校全人」とささやかれる時代となっ

図6-6 林業科の教科 科目と単位表

教科	科目	経営コース	土木コース	林産コース
国語	現代国語	7	7	7
	古典 甲	2	2	2
社会	倫理 社会	2	2	2
	政治 経済	2	2	2
	日本史 A	3	3	3
	世界史 A			
地理 A	3	3	3	
数学	数学 I	5	5	5
	応用数学	7	7	7
理科	物理学 A	4	4	4
	化学 A	3	3	3
	生物	3	3	3
保健体育	体育	7	7	7
	保健	2	2	2
芸術	音楽 美術 書道	2	2	2
外国語	英語 A	9	9	9
農業	育林	10	4	4
	森林経理法規	9	3	3
	測量	7	10	4
	応用力学	2	2	2
	林産製造	2	-	7
	木材加工	2	2	9
	砂防	2	2	-
	伐木運材	4	2	2
	総合実習	3	3	3
工業	機械電気	-	2	2
	工業経営	-	-	2
	土木施工	-	4	-
	土木設計	-	7	-
商業	計算実務	-	-	3
合計		102	102	102

た。

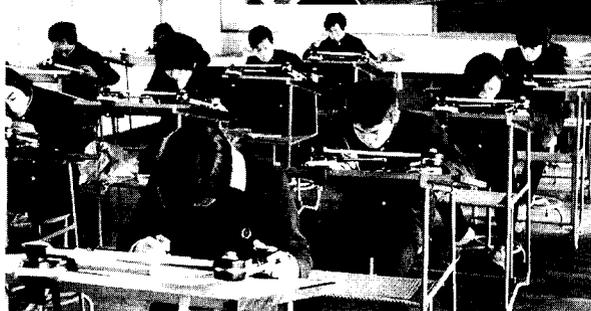
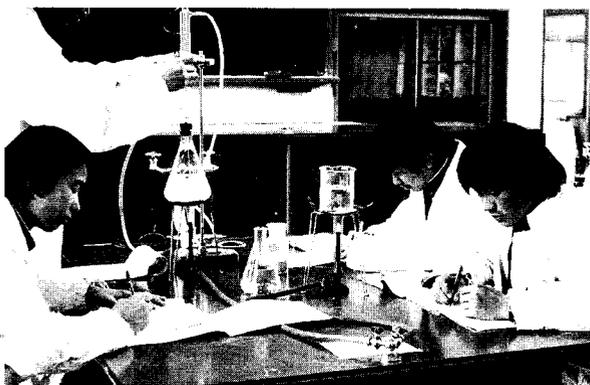
多様な資質、興味・関心を持った生徒に対して、より多くの選択を用意することは、さまざまな困難も予想された。しかし林業科・工芸科ともにあえてこの改革に挑んだ。さらに教師自身の出身大学等への研修留学も毎年計画的に実行された。そのため創立以来伝統的に重視してきた実験・実習の教育は

新校舎落成による施設々備の充実と相まって飛躍的に発展した内容となり、各コースの特色が鮮明に発揮された。

教師と生徒は心を一つにして技術の深化や資格取得等に取り組み、そのためには放課後はもちろん、休日までも労を惜しまず学習を重ね、実力全国トップを目指して切磋琢磨した。教育体制改革の輝いた時代であったといえよう。

写6-30 林業科の実験実習 (古川彦次・41回・歳)

新しい施設・  
設備の中で



写6-31  
工芸科の製図実習 (同)

1、林業科の場合  
林業科では、三角測量から地形図作成への本格的実習や、高速道路のクロソイド曲線の設定実習、空中（航空）写真の判読



写6-31

索道による運材実習 (昭和42年)



写6-32

や図化への取組み、材積測定器による林分材積測定実習、木材の成分分析、合板や集成材の製造実験、等々、新分野へ幅を広げた。

また小型集材機を導入し、索道による伐木運材実習（第五林班から校庭西北端へケーブルをかけて多量の間伐材を集材し、



写6-33 カラマツのさし木を研究・実験する佐々木教諭と林研究部員たち（『1966年卒業アルバム』）

そこからトラックで市場へ）は、以後演習林実習に新しいページを開いた。さらにコンクリート強度試験など、土木設計・施工に伴う実験も始まった。

カラマツのさし木に成功

昭和三九年からカラマツのさし木の研究・実験が、佐々木弘文教諭を中心に行われた。特に中部電力の協力を得て電熱温床を使い、五年後には、さし木に成功した。さし木されたカラマ

ツは一年間で約一メートルほどに生長し、さらに実用化を目指して八千本のさし木が行われた。

進路面でいえば、初級職公務員試験合格者は国、地方を含めて例年三〇名前後を数えた。また一度に三名の測量士の合格者を出して関係方面から注目されたりもした。

現場ですぐに役立つ技術の修得、進路目標達成の必要性などから特技指導が年間を通じて、放課後や休日までも利用して実施され大きな成果を得た。

昭和四一年一〇月時点での実績をみると次のようである。

図6-7 資格取得及び検定合格の状況

科	種類	合格状況
林	測量士	2名（合格率—全国3%~5% 本校30%）
	測量士補	18名（合格率—全国10%~20% 本校30%）
	架線技士	30名（合格率85%）
	珠算	3級以上 20名 4級 多数
林・土	計算尺	3級以上 11名 4級 44名
	実用英語	3級以上 9名 4級 26名
	自動車（普通）	10名
	孔版、レタリング	—————

## ●コラム 静岡県職員の採用試験を本校で

昭和三五年三月の卒業生が静岡県職員採用試験で林業部門を独占した。第一次試験の合格者はすべて「木曾山林」生であった。静岡県では生徒の都合を考慮して、第二次試験を本校の校長室で実施するという異例のはからいをしたのである。

この頃は天竜川沿いの静岡県からも本校に入学し、中には生徒会長をとめるなどの人材が多かった。ちなみに、この年の公務員試験合格者は約六〇名に及んだ。

こうして当時の本校生徒は近隣の林務部へどしどし進出したのである。

## 2、工芸科の場合

工芸科では、デザイン県展に大量入選を果たした。昭和三八年デザインコースを設置して以来、目立った活躍の場はなかったが、四三年二・三年生は、第4回デザイン県展へ出品することとなった。生徒たちは奈良本（旧姓下條）守正教諭の指導のもと、夏休み前から夏休み明けの提出期限ぎりぎりまで創作した。

その頃は様子もわからず成果はあがらなかったが、二年、三

年とたつと様子もわかるようになり、入賞するようになった。

昭和四七年度には、入選作品五八点中、本校生徒作品三一点と半分以上を占めた。さらにその中に、特選入選が三点含まれるなど大きな成果をおさめるようになった。（このデザイン県展については、次章で詳述）

また家具の作品発表会が年二回開催され、最初は展示即売会、次は卒業制作展となった。これら作品は技術的にも高く評価され、即売会には大勢の人々が集まった。昭和四八年の「学校だより」には次のような記事がある。

「作品展を終えて」

「学校だより」（昭48）

工芸科の作品即売会も、いつしか二五回目を迎え、好評と盛会のように全作品とも売却することができました。

工芸科は、戦後木材工芸科として発足し、時代の経過とともに工芸科となり、本年四月よりインテリア科と科名を変更し、住居における室内塗装業に主眼をおく教育内容へと発展してきました。

この間毎年展示即売会を開催し、新聞、テレビ等によって広く一般に紹介され、多くの保護者や一般の方々に関心を寄せていただき、学校としても非常にうれしい事と思っております。

四月以来設計図にもとづいて製作した作品で、特に三年生の作品は、生徒自身が一人、もしくは二〜三人によって設計した作品であり、回を重ねるごとにデザインも斬新で、時代感覚の

上に立って設計された作品約一〇〇点を出品することができ  
ました。

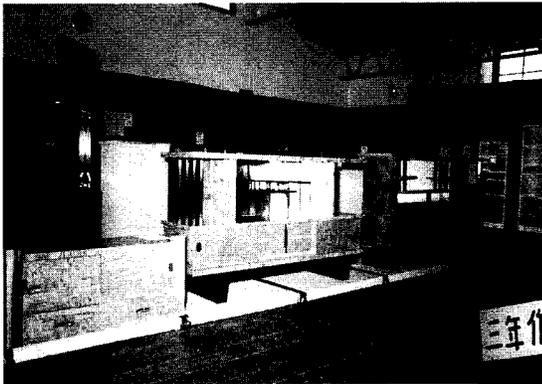
本年は、ひのき祭が開催される年度に当りましたので、その  
一環として実施するよう計画を立てました。即売会（10月28  
日）当日は秋雨となり、来場される方々が少ないのではないかと  
一抹の不安はありましたが、予想以上の盛況で、一時は会場  
も溢れんばかりの来客となりました。購入の希望も一品に二十  
数人の申込みをされる作品もありました。このように、年毎に  
好評を得ることができ、感謝しています。

今後とも一層努力するとともに、インテリア科としての教育内  
容を生かす展示会の方向で進めたいと検討しています。

なお設計製図展も合わせて実施しましたので、工芸科、イン  
テリア科の内容について、より深く理解していただけたことと  
思っています。

この年の作品展を信濃毎日新聞社は次のように伝えている。

「木曾山林高（芦部隆彦校長・木曾福島町）の文化祭、第14  
回ひのき祭は、一〇月二七日から二九日の三日間、同校で開い  
た。呼びものは文化祭より伝統のある工芸科生徒の作品展と即  
売会、一年生は壁かけ鏡、三年生は洋服ダンスなどの四点セッ  
ト、サイドボードと言うように、学年とともに複雑な作品を手  
がけ、全部で百余点の力作が展示された。どれも高校生徒とは  
思えない力作ばかり、値段も電話台・姫鏡台とも二千五百円、



写6-35 見事な生徒の作品

### 活況を呈した生徒作品の展示即売会

（昭和48年）



写6-34 見学や購入に訪れた会場いっぱいの人々

洋服ダンス・整理ダンス・食器棚・下駄箱の四点セットが六万三千五百円と、材料費だけの安い価格で即売された。ちょっと削りのムラはあるが「修行中だからもともと、それよりいいねいで手を抜いていないところがすばらしい」と婦人たちにはなかなかの人気だった。

『学校だより』（昭和48年10月28日）

## 第四節 生徒の活躍

### 一、生徒会と部活動

#### 1、生徒自治会から生徒会へ

昭和三十年代前半の生徒会には「生徒自治会」としての意識が良い意味で充満していた。当然、日常の部活動にも自主の精神が強く、生徒会活動は多岐にわたりエネルギーで高度であった。例年朝日新聞東京本社の論説委員を招いて講演を聞き、弁論大会は県下高校弁論大会として県内高校を対象とした。毎年の校内四地区対抗演劇会では、寄宿舎地区が連続優勝するなど熱が入った。また、東京から一流の劇団を招致し他校にも奨めて演劇鑑賞を開催した。定例生徒総会は熱の入った場面があり、全職員も出席して丸一日を費やした。

しかし、昭和三十一年（一九五六）改訂の高等学校学習指導要領で、ホームルーム活動、生徒会活動などは、教育課程の一部として位置づけられ、次いで同三五年改訂の新学習指導要領で（昭和38年度より実施）従来の生徒会主催の行事はすべて学校行事として学校が実施することになった。

国は生徒の多様化や活動のマンネリ化を是正して、自主性を高める指導を示したが、山林独特の野性味に富んだ自治の精神

が次第に薄れ去っていった恨みも否定できない。例えば、昭和二七年制定の「生徒自治会前文」と同三四年の「生徒会会則前文」を比べてみると、それがよく現れている。

前者の「生徒自治会前文」では、

我々木曾山林高等学校生徒は、我々自らの手による自治活動を通して、我々の理想である自治と平和の学園を建設し、新しい伝統の創造をはかり、以て民主社会への貢献を誓う学徒となるよう努力せんことを目的としてここに規約を制定する。(昭27)

と述べ、特に「我々自らの手による自治活動を通して、我々の理想である自治と平和の学園を建設し」と言うように主体的、意欲的であったものが、後者「生徒会会則前文」では

我々木曾山林高等学校生徒は、我等の理想である自主と平和を希求し、且つ自主的精神を重んじ、新しい伝統の創造をはかり、以て民主社会への貢献者となるよう努力せんことを目的としてここに会則を制定する。(昭34)

と述べるように、穏健な表現に変わり、その中にあった自治の精神や新学園建設の夢は薄れていったと言わざるを得ない。

## 2、生徒会の変革と消長

昭和四〇年前後、生徒会の会則や組織に次々と改訂の手が加えられた。一連の主な動きを列挙すると次のようである。

昭和三八年 生徒会で細則作成検討を始める

三九年十二月 会則と組織の改訂

四〇年 二月 総会等 六つの細則が完成

十二月 再び会則・細則審議委員会が設置され、通学班の組織が発足

四一年 二月 校風局が定められ「校風局及び通学班」の細則完成

尚、昭和四〇年度から「ひのき祭」は、三年に一回の開催へと変わった。

図6-8 昭和三七年度予算

予算総額 548,000 (円)		図6-8 昭和三七年度予算
	名称	予算(円)
執行部	財務局	750
	事務局	75,700
	体育局	56,900
	文化局	12,330
	ひのき祭関係	58,500
委員会	新開	102,900
	放送	21,710
	保健	860
各部	校風	3,220
	蹴球	17,420
	籠球	15,320
	相撲	17,240
	柔道	14,980
	野球	24,790
	卓球	9,280
	庭球	8,300
	陸上	16,390
	山岳	14,390
	排球	13,440
	林研	14,750
	文芸	31,200
	美術	5,000
	弁論	280
	演劇	3,000
科	9,350	

ちなみに昭和三十七年（一九六二）四月、生徒総会で決定した諸行事と各部の予算は図6-18の通りであったが、生徒会に対するさまざまな意識の変化も見られるようになった。

〈行事〉

球技大会、相撲大会、水泳大会、ひのき祭、運動会、  
強歩大会、スケート大会

翌年三月、一カ年の活動をふり返り「更に高い自治の理想を求めて止まない生徒会の確立」を願ってアンケートを実施した。その結果のうち特に顕著なものとして

- ・生徒会行事に対し約38%の者が積極的意欲がなかったと反応し、来年度に向けては73%の者が一生懸命努力しようと考えていること。

- ・クラブ活動への参加率は72%であったが、77%が有意義であると理解していること。

凡そ三〇パーセント前後の無関心、無所屬的な存在が浮かびあがっている。

この年三八年の本県の高校進学率は、約六五パーセントに上昇、自治の発展を求める生徒会役員と、一般会員との温度差が徐々に広がっていく実態がうかがえる。

昭和四三年（一九六八）秋の選挙で会長となった中村金彦は挨拶の中で次のように述べている。

「……無気力、無関心、無責任のいわゆる三無主義が、山林

高校を覆い始めたのは、たぶん二・三年前ぐらいだろう。そして一人一人孤立してしまった。」「現在の生徒会に何が必要であるのか。第一に乾ききった人間関係に友情・信頼を取り戻す事であろう。生徒と先生、上級生と下級生、同級生同士が如何に友情・信頼によって固く結ばれるかを考えねばならない。次に我々はそれを実行するために何をなすべきか計画実行しなければならぬ……」  
「ある雑誌に現代の高校生は教師を『敵』と



写6-36 昭和42年度の生徒総会

していると書かれていた。山林高校においても残念ながら『敵』でなくても『水と油』化しつつあるのではないかと思われる。本当に心の底にあるものを教師に吐き出せるだろうか、と僕はそして教師はそのことを真剣に考えてくれるだろうか、と僕は疑問に思える。「我々は討論を欲し対話を欲し、信頼を欲し、友を欲し、決して非行など欲していない。現在の生徒会に必要なものは話し合いの場である。」等々の問題を指摘して、最後に「我々は何を必要とし何を実行すべきか。権利を主張する前に自分の義務を果たす事が大切である。」

翌四四年十一月の生徒会新聞で「山林生よ、気概の乏しさを痛感し総ざんげせよ！」と現状を鋭く突いた論説が出た。

「最近の高校生は自分の周囲に波風を立てることを好まず平均化された人間になりつつある。」とマスコミや父母、先生達からよく言われる。本校もまた現在は、こじんまりと気概のない生徒の集団に墮落してしまった。優れた資質の生徒が集まらぬのは、

① 林業政策の振興が国の主要な目標から除かれ、斜陽産業となりつつあること。

② 進学率の向上と共に、普通科重視、知育偏重の風潮が強まったこと。

その結果、基礎学力の低下とそれに伴い、広い視野を欠き、批判眼も独立した人格としての気概も乏しい生徒が多く集まった。

こうした資質の低下は、自らの周囲に波風を立てぬ風潮と関連して諸々の問題を校内に内在させている。昔日の大山林の姿が次第に没していく時、これからの我々の在り方と新しい伝統の創造について真剣に考え、行動に移していくことは非常に重要なことだ。正しい批判眼と進取の気概ある生徒の育成こそ、本校教育の在り方として確立されなければならない。」

と教師の奮起にも力点をおいた意見が出た。

四五年七月、生徒会長榎本力は次のような意見を述べた。

「ここ二・三年、三無主義がはびこった。これ即ち執行部はじめ生徒会諸機関が会員に信用されなくなった結果と考える。役員一同が本気になって信頼できる生徒会を作り上げると共に、活動一つ一つにより充実した新鮮さを吹き込むことが必要である。」「この会に会則があり正当な権力がある限り、何人といえどもこの会を乱すことはできない。生徒会は学校の中の生徒会であり、学校のための生徒会ではない。従って正当な活動がある以上、それを無視したような学校側の態度には、我々も正当な立場で対抗していかなくてはならない。それと同じく内部でも互いに立場を無視しないように望む。そうすることがまともな生徒会を築きあげていくだろう……」

この年、本県の高校進学率は八二パーセントとなった。三無主義が蔓延して生徒会活動が衰えていく中で、生徒会の再生を訴えた会長の言葉の中には、学校側の指導管理に対する疑念と、会員結束への切実な願いがにじんでいて変わりゆく生徒会の姿が推察できる。

四八年三月三日付けの生徒会新聞には、「生徒総会僅か二十分で終了」とあった。

### 3、生徒作品にみる青春

昭和三七年度ころの文芸作品の中から詩と随想を取り上げた。

〈詩〉孤独のしらべ

三年B組 山田 誠

灯を見ながら考えた。

「ロシアに行けたら……」と。

静寂な社殿に立つてのことでした。

哀愁と誇りを欠かないあの歌が私の魅力。

独りでいって独りで眺めて……。

幼き頃を思うのです。

——そう。

パラダイカの旋律にうっとり歌うの忘れて……故郷にあ

るダークの姿を夢みるのです。

——アムール川のさざなみを聞いて平和を祈り、バイカルに佇んで故郷を恋する。

……ドナウに立ってヴォルガに浮ぶ。

バルカンの星を仰いで灯を見つめて。

……涙を落して……パラダイカを弾く。

寒さに震える道をゆつくり歩いてそこに茂るグーリヤンを

眺めて……小さなぐみの木に立つ。

ペチカにあたってトロイカで走る。

——仕事の歌を歌って収穫を祝って……素晴らしいでしょう。きつと。

そして最後にドンコサツクの合唱を聞いて、楽団カチューシャの演奏が見えたら。

——つまらないあどけない話であったとしてもそれはそれでよいのです。

ロシアに行けたら。

ロシアにです。

やしろに立った美貌な木立が突つたつていたつけ——（あ

るやしろに立った時より）

『木曾山林高校新聞』44号（昭37・6・9）

甘い青春のあこがれを切ないまでに表現した詩であり、今なお共感を覚える人も多かろう。

〈随想〉 造る、造られる

三年A組 野田 一雄

……池田さんについては、種々な失言がある。一番初めに有名になったのが、農林大臣時代のいわゆる「貧乏人は麦を食え」らしい。つい最近になって「所得倍増」が国民の口の一つ一つから何回となく顔を出した。(中略) 今年になってからはといえば「人造り・国造り」という言葉であらうか。(中略) 新聞にはもちろんの事、ラジオ、週刊誌、その他PTAの会合で、○○討論会では政治評論家や××評論家等の口に、はては××陳情団の口実にと「人造り」の使われる範囲は非常に広い。

ところで私が不思議に思うのは、一口に人造りと言うけれど、人間がそう簡単に出来るものかということだ。まして池田さんのような立場の人が言ったとなると、その対象となるところの人は、いわゆる九千万の日本国民となるわけだ。たとえその言葉が施政方針の中に入っていたとしても、九千万の国民が一人の政治家、一つの政党によって造られるだろうか。どうも納得出来かねるような言葉だと思う。しかし又、決してできないと断言することも不可能なことだろう。何故ならば、過去には多勢の人が一部の人に造られた過去の歴史があるからである。(中略) 成人式の日にアナウンサーが「あなたは総理に何を望みますか」と質問したのに対して、「今はまだそんな事わかりません。」

と答えたのをラジオで聞いて私は驚いた。(中略) 人に

造られるよりも自分で自分を造り上げたなら、これに越した事はない。しかし現在の情勢だと、どうしても造られやすい傾向にある。だからと言うわけではないが、多少なりとも人に造られることはやむを得まい。ただ造る造られるその目的が大切なのではないか。人造りを一人の政治家、一つの政治団体のキャッチフレーズとしてではなく、九千万国民の考えとして将来努力していったら、日本民族の資質はきつと向上するだろう。

『木曾山林高校新聞』45号(昭38・3・6)

#### 4、『いず美』から『山林文学』へ

↳戦後の本校生徒の文芸活動を垣間見る↳

##### ①はじめに

本校生徒と文科系の活動、わけても文章による自己表現は開校当初から活発であった。その内容は林業・工業の科学的な学習から文芸・芸術分野まで踏み込んでいた。

本校では、自然観察、調査、実験、実習が中核となっていたことはもちろんであるが、それらの中核をなすための人間性の陶冶は殊の外大切にされてきた。例えば、戦時中英語の授業が継続されたり、『校友会報』『岐蘇林友』『蘇門会報』『木曾山林高校新聞』などにキラ星のごとき文芸活動の成果がしばしば掲

載されてきた。

本校の図書資料の中には、戦後創刊し昭和四〇年まで継続の文芸部誌九冊が保存されている。この部誌名は創刊から十六号までが『いず美』、十七号から改題され『山林文学』となつて二〇号までである。

このうち残存している冊子の号数は九・十一～十三・十六～二〇で、体裁はB五判縦書き二段組、どの号も六〇～七〇ページほどの冊子である。

これら文芸部の活動は、生徒会活動の一環として思索・創作を通して自己表現・自己実現にひたむきな生徒の姿が全校に紹介されたものである。

ここでは、はじめに文芸部活動について歴代部長の意を代弁しているとされる井出喜久雄（十一号）の言葉と、そうした活動を激励されている古屋清校長の弁（九号）を紹介し、後は号数ごとその概要を紹介する。

## ② 発刊の言葉（『いず美』第十一号 井出喜久雄・53回）

人間形成への過度期たる段階にいるわれわれが、文学的自覚と文学に対する憧憬的情熱を持つことは、自己の情操と人間性を、内容的にも実質的にも豊富にし、知性と思考的判断とをより高次なものへと導いてくれる。

また、文学的自覚を基盤にし、文学的意欲を旺盛にし、人生的意義の把握と文学的認識を深める要因となる。

そしてそれにより個性を伸長し、事物に対する洞察力を深め、近代的センスとモラルとの個立的・積極的・自主的創造性をもった新しい独自の特徴を育むことが、我々に与えられた大きな課題ではないだろうか。（以下略）

## ③ 読書について（『いず美』第九号 学校長古屋清）

新教育が実施されてから、数多くの良い面が育成されているけれども、一面には欠点とも思われるものもある。その一つは「書く能力の不足」である。すなわち、自分の考えていることを文に表わす能力、人の話すことを要領よくまとめ書く能力が昔の教育より欠けているのである。

文芸部の機関紙である「いず美」を拝見して感じたことは、とかく実業高校は技術中心の考え方が多くて、こうした文芸方面に力を入れる人が少ないにもかかわらず、この学校にはこんなにりっぱな文芸方面の芽を伸ばす機関紙が存在し、しかも内容の充実していることに敬服したのである。

多数の生徒がこの機関紙に寄稿し、かつ読んで潤いのある文化の香りの高い人生を送るための心の糧としていただきたいと思う。このことが、新教育の欠点を除くことにもなると思う。

私は、そのことのほかに「読書の大切さ」を訴えたい。

「読書は全人をつくり、会話は間に合う人をつくり、筆をとって書くことは正確な人をつくる……」これは、フランス・ス・ペーコンという人の言葉である。

読書によって未知の世界が発見され、自覚が促され、人間としての深みを増し、真理を求めようとする心が生まれてくる。

先生や友達の感化によつて導かれ啓発されていくと同じように、読書によつても刺激を受けるものである。唯たんに経験の連続だけでは独善的なものとなり、視野が狭く普遍性の乏しいものになりやすい。

読書することによつて視野を広め、ものの真相を正しく見る目を養い、ものの本体を正しく理解する能力を体得することができる。しかし、読書は無方針に多くの本を乱読したり、「消化の多読」では効果は上がらない。

主観の小さな世界にあつて、その上さらに色眼鏡をかけて見るような偏見から書籍を選んではならない。何をどのように読むべきかは難しい問題である。新聞や雑誌に出ている図書紹介欄を読んだり、日々接している先生方から本当に良い本を推薦してもらつて正しい読書生活のできるよい習慣を養うように心がけていただきたい。

#### ④各号の概要

『いづ美』第九号（昭二九・六・三〇）

巻頭言で部長沢田瑛（52回）は、人間の性質の中で「誠実」が最も重要なものであるとし、人間の業績にだけ目を向けるのではなく、その背後にある努力を知る必要がある。またその努力は正しき美しき結果を得んがための進む道である、と力説し

ている。

この号の内容は、論説六、随想六、小品四のほか短歌・詩などによつて構成されている。この中で最も特徴的なことは、先に引用した古屋清校長の外、下村昭一・池田錬二両教諭が原稿を寄せていることである。

下村は「存在の忘却―夜の世紀―」と題して、私たちはどこでキルケエゴールやニーチェから離れ、どこからハイデツガーやヤスパースを捨ててしまったら良いかという問題に踏み込んだ哲学的な思索を寄せている。

また、池田は「敗戦の表情」と題し、八月十四日から三日間の東京都内の状況と自分の行状記を紹介している。

編集後記に「昨年は、先生方に掲載作品を選んでいただいたが、部員全員が編集と選択に当たった」とあり、自らの苦労が実つた喜びで結んでいる。

『いづ美』第十一号（昭和三〇・九・二一）

発刊の言葉（井出喜久雄）は先述のように巻頭に大きな存在感をもたらしている。この号以後部員たちの自由な表現が目立つことと、ペンネームによる作品が多いこと、更には一人で二点も三点も作品を寄稿していることが特徴的である。

井上達雄・宮口龍治などは、評論・創作・随筆と多彩な作品が目立つ。

特に宮口の「文学と自殺」では、ゲーテが『若きウェルテル

の悩み」で若きウエルテルの自殺を取り上げている。

作品が発表された直後、この青年にならない自殺するものが続出したというがそれは畢竟文学鑑賞のあり方が問題であると力説し、もっと広い視野の鑑賞が大切であると結んでいる。

田中勝己(53回)は、実名で「嗟青春は美し」なる創作ほか二点を寄稿し意気軒昂なところをみせている。また彼は、編集後記にも「作者の心を通した第二の真実性が語れるということとは、人間完成への大きな前進である。そういう若者よ来たれ」と記している。

#### 『いず美』第十二号(昭和三一・二・二〇)

先号につづき井出喜久雄が巻頭言で「個々人の内的な情熱と意欲に燃えるものを、そのイメージを、モチーフを独自の表現方法で発表し、創作的実力を試練したい」と記している。

作品は、評論四、小品四、随筆三、創作四、それに詩八、短歌と多彩である。総ページ数も八〇と厚みを増しているのは、創作が四点で四〇ページに及ぶ力作ぞろいだからである。

実名の部員作品では、笠井正徳(54回)、「道徳的行動と知識の欠陥」「路程」、高橋英雄(同)「葡萄」「朝の太陽」等が楽しい。

#### 『いず美』第十三号(昭和三一・一〇・八)

十二号で紹介した高橋英雄が巻頭言の中で「作品はたとえ未

熟なものであっても、真剣さを常に保持し、自己の現実的事実を正しく明確に把握しよう」と呼びかけている。

この号では、古屋清校長「富山に旅して」、窪田勇教諭「神々のいたずら」、下村昭一教諭「感想の感想の竜頭蛇尾」、細川洵吉教諭によるワーズワースの詩「泉」の翻訳等々先生方の作品寄稿が光っている。

美岳建一(仮名)の「孤独の酒宴」は十四ページにおよぶ長い創作である。石原慎太郎原作「太陽の季節」の映画を観た惇二と光枝にとっての受け止めの違いが淡々と語られ物語は進展して行く。

そして惇二がひとり下宿へ戻り、現実に戻って実感したことの一つは、本能の赴くままに動き自然に流れる映画の登場人物のように踏み切ることも出来ず、光枝と二人でいる筈の自分が「自分一人だけの自分」を見ようとはと驚きながらも生きていくしかないと眩く。こうした惇二の心の内を知ってか知らずにか、光枝の傾斜していく女性心理に彼もまた戦慄を押さえきれない……。

#### 『いず美』第十六号(昭和三三・一一・一)

十六号の内容は、創作八、小品一、童話一、紀行三、詩五。これらの作品は全部部員の手になるものである。

この号は、始めて活版印刷されたもので、創刊号から前々号が謄写印刷、前年度のタイプ印刷に比較すると格段に各ページ

の斬新さ読みやすさが加わった感じである。部長の安藤毅欣（56回）も後書きで「永年の夢が実現し全く嬉しい」「部員以外の協力は望外の喜びである」と二重の喜びを述べている。

内容的には、全学年平均して原稿が並び、比較的穏健で地味な記述のものが多し。藤原勉（58回）「生きている死」は、転入生チョンこと三原良吉が、原子病を苦に鉄道自殺するという異色のモチーフで創作を綴っているのが注目される。

『山林文学』〜いず美改題〜 第十七号

いず美を改題し「山林文学」とした理由は特別に記していないが、ページ数も増し、長編の創作も何本か加わってその意気込みの程が伺える。

巻頭の創作は、佐々木康夫（57回）の「甘い水苦い水」、巻末の池内卓（57回・故人）共に十ページを越す長編である。どちらも青春期の恋愛観と現実とのアンバランスが生み出す屈折した恋物語である。

後書きで佐々木は「今年一年、文芸新聞の発刊、展示会の活躍などの外、ここに長編小説の登場のこのご活躍ぶりを見て下さい。どなたに聞いてもウーンとうなるくらい、大いに見せびらかして恥ずかしくなし。部員一同鼻高々である。」と胸を張っている。

『山林文学』第十八号（昭和三六・六・一）

十八号は、三年生中心の作品が並び、一人一作の創作・小品等力作が目立つ。その中には、卒業した池内卓が先輩寄稿して花を添えている。

池内は「ある少女の告白」と題し、少女の側からある青年が目前に現れ、ある時は私に甘え、ある時は私に怖れ、ある時は私をからかいながら、それが当然のように私から離れて行ってしまったことから、自分の愛に対する認識を捨てざるを得なくなってしまった……愛の脆さ、はかなさを表現しようと試みている。

編集後記を引用して紹介に代えたい。

本校においては、文科系の部活動充実が年々叫ばれながらも、その発展の色は余り見られなかった。地味な活動というせいもあるが、確かに不活発であることは認めざるを得ないだろう。その中であってわれわれ文芸部は、九月に文芸新聞を発行し、続いて山林文学に取り組んできた。最初の計画では五〇ページのものを作るには原稿が不足すると踏んだのに、その取り越し苦勞は吹っ飛んで、原稿オーバーと金の工面が現実となった。

『山林文学』第十八号

『山林文学』第十九号（昭和三七・三・一）

先号と同じように、六名の三年生（59回）が一作品ずつ創作・小品等を載せている。どの作品も、作者の誠実な生きざま

を抄出したような、作者の生活の一部分を切り取ったような珠玉の文章で、読後感が爽やかである。

巻末は、北原正次「憎い人」は、冊子半分のページにわたる大作である。鈴木建具店に寝泊まりして働く四人の若者職人と、主人の娘とをめぐる愛憎がテーマである。

文章も、そのストーリーの展開具合も筆まめにまとめられている。それでも北原は編集後記に「イメージは良く浮いてきたのですが、実際に筆を執ると、なかなか思うように筆が走ってくれなかった」と述懐し、文章で表現することの難しさを滲ませてしている。

『山林文学』第二〇号（昭和四〇・二・二八）

先号以来二年ぶりの発行である。諸物価値上げで印刷代は二倍にもなってしまったので最初の十ページは活版印刷、後半の九〇ページは謄写版印刷して合本という苦心作である。

内容的には、文芸部全員による「小林一茶の研究」（昭和三八年度研究）、「アルバイトの記録」（十一名）、「掌編集」（二二名）、創作（五名）、ほかに随筆、詩等々内容的には変化に富み多彩な内容である。

学校文集的な内容であることと、発行部数を四三〇部とし全校に配布した（編集後書）という文芸部活動の総括が記されている。



写6-37 昭和29年の文芸部の顧問及び部員たち

(池田鍊二・元本校教諭蔵)



写6-38 『いざ美』と『山林文学』

5、体育行事や諸活動の中から

①校内水泳大会 昭和三七年（一九六二）

黒川渡ダム湖に特設した二五メートル、七コースのプールで、

五〇メートル自由形

一〇〇メートル自由形

一〇〇メートル平泳



写6-39 1966年度『卒業アルバム』

ダム湖をプールに  
本校ならではの  
水泳大会



写6-40 1966年度『卒業アルバム』

五〇メートル平泳

五〇メートル背泳

メドレーリレー

これら六種目のホームルーム対抗競泳が行われた。その結果  
Hホーム（一年）が、二位Aホーム（三年）に大差をつけて優  
勝した。

一位Hホーム32点、二位Aホーム19点、三位Cホーム14点

②仮装行列 昭和三八年九月十六日

運動会当日の呼び物「仮装行列」は、どのホームも例年にな  
く作りもの、飾り付け、服装まで凝ったもので、初秋にふさわ  
しい色どりを見せた。規模の大きい豪華なものが多く、各ホー  
ムの意気込みと努力のほどをよく見せていた。審査の結果、

一位 Cホーム（三年） 山林七福神

二位 Eホーム（二年） 文福茶釜

三位 Aホーム（三年） 天草四郎

③相撲 全国大会出場 昭和三七年

七月二八、二九日、大阪府立体育館での全国大会に桑原昭一  
（三年）出場。（昨年は山田幸雄が個人戦でベスト16に入った）

一回戦 桑原×——寄り切り——平川（中京商）

二回戦 桑原○——上手投げ——古藤（岸和田市産）

三回戦 桑原○——寄り切り——臼井（明大付属中野）



写6-41 1位の山林七福神 (1963年度『卒業アルバム』)

四回戦 桑原×——寄り切り——堺本 (宇治山田)  
 二勝二敗で決勝トーナメントに出場出来ず。しかし明大付属  
 中野高の強豪臼井 (春日野部屋で練習) を破ったのは、あっぱ  
 れ金星であった。

④ 駅伝競争 昭和三七年

陸上部は、木曾街道駅伝・中信高校駅伝・長野上田間駅伝に  
 上位入賞を遂げた。

・第十一回木曾街道縦断駅伝競争は、九月二三日、藪原公民館  
 前をスタート、須原小学校までの三六・五キロメートルを一  
 般三チーム、高校九チームの選手五七名で行われ、山林A  
 チームが優勝した。成績は、一区古田武久 (区間優勝)、二  
 区田口国将 (区間優勝)、三区中谷泰治 (三位)、四区野尻誠  
 一 (三位)、五区沼田功 (区間優勝) であった。

・中信高校駅伝は十一月四日、松本県営陸上競技場  
 有明間折返し四二・一九五キロメートルに十五チームが参加。  
 本校はよく健闘し四位に入賞した。

・第十二回長野——上田間駅伝は、十二月九日、一般二四チ  
 ム、高校十三チームが参加して行われた。本校チームは健闘  
 よく高校の部三位に入賞した。

- 一区 (九・七 km) 古田武久 区間三位
- 二区 (六・四 km) 中谷泰治 〃 三位 (区間新記録)
- 三区 (五・一 km) 沼田 功 〃 二位 (区間新記録)
- 四区 (七・八 km) 深沢政利 〃 六位
- 五区 (六・五 km) 田口国将 〃 三位

⑤ 強歩大会 昭和三七年十一月十日

昨年と同じく木曾福島駅前を午前八時五〇分スタート。国道



写6-42 関門の風景、保護者も応援 (泉万珠男・元本校教諭蔵)

十九号線を北上し、塩尻市の桔梗ヶ原農業高校(現、塩尻志学館高校)までの四五キロのコースで行われ、完歩率九二パーセントであった。

クラス総合成績 一位Gホーム(一年)

二位Hホーム(一年)

三位Eホーム(二年)

個人成績 一位古田武久(D) 四時間八分五十五秒

二位田口国将(B) 四時間九分五十秒

三位深沢政利(G) 四時間十分十五秒であった。最終者がゴールしたのは、午後五時ころで約九時間を要した。

### ⑥校内スケート大会 昭和三八年一月二三日

ダム湖の特設リンクで寒風について行われた。競技は五〇〇メートル、一〇〇〇メートル、一五〇〇メートル、三〇〇〇メートル及びリレーの五種目で熱戦を展開し、喚声が演習林にこだました。

総合優勝 Gホーム(一年) 二二点

二位Aホーム(三年) 二十点

三位Dホーム(二年) 十八点

種目別 五〇〇メートル 一位小川原浄(D) 六十秒七

二位古田正人(G)

三位桜畑敏夫(F)

一〇〇〇メートル 一位名取誠治(G) 二分〇秒八

二位沼田功(C)

三位手塚征(A)

一五〇〇メートル 一位井出四五六(E) 三分二秒四

二位清水和洋(G)

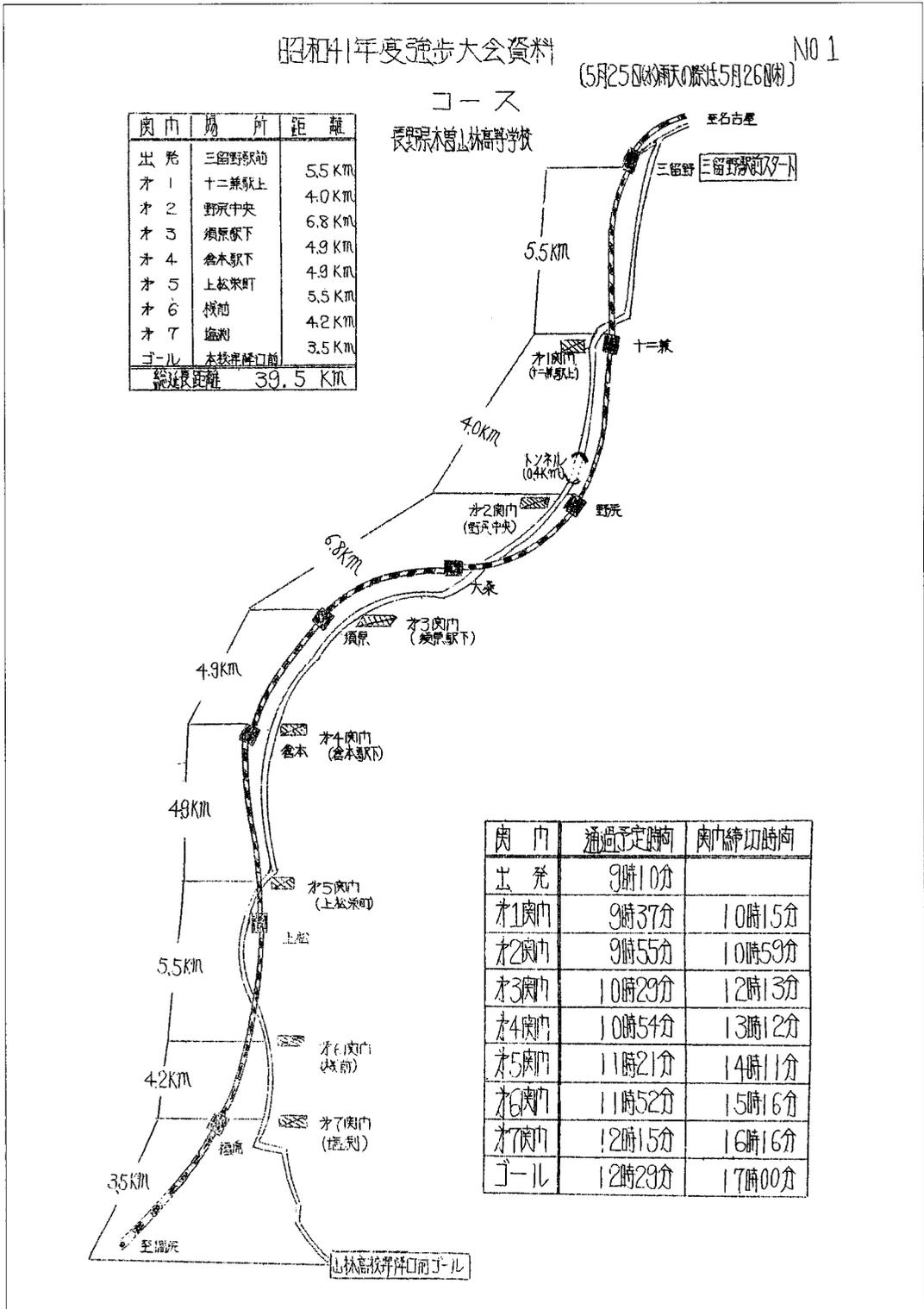
三位森下政義(F)

三〇〇〇メートル 一位名取(G) 七分三秒一

二位手塚(A)・三位清水(G)

リレー 一位 Dホーム(小川原・篠原・平田・有坂)

図6-9 昭和41年度は、三留野駅から本校までの39.5キロでおこなわれた。





だろう。高等学校においては教科学習の他に特別教育活動と呼ばれるクラブ活動、ホームルーム活動、学校行事等の領域があつて、これらに自主的に積極的に参加し得てはじめて全人的成長が期待される。ひのき祭は一つのけじめであると同時に限りなく発展すべき踏みきり板でもある。二度と戻らぬ高校生活の思い出を充実したものにしていこう。

#### 松本政男生徒会長

光輝ある生徒会の最大行事である学校祭が目前にきた。我々若人はこの三年間無我夢中で汗水流し、力の限り、学習にクラブ活動に、二度とこない青春時代をぶち込んできた。我々はこの機会に満ち溢れた若い力を大いに発散し、自ら人間形成に役立つ何かを得て、良き青春の一頁として心の奥深く残したい。

### ②日程と概要

#### ● 第一日

◎開祭式(体育館) 九・〇〇～九・一〇

◎研究発表(体育館) 九・一〇～十一・四〇

・文芸部「路傍の石の作中人物の研究」3A南

・科学部化学班「樹液のPH」3C青木

・同 生物班「木曾駒高原スキー場の植物調査」3C中

・同 物理班「テープレコーダーの製作」3A大畑

・林研部経営班「林地肥培」3A大目

・同 経営班「コガネムシの調査」三年間継続調査

・工研部「木曾谷の家具の動向」3C田中

・同 「塗膜の耐久試験」3C三並

・保健委員会「年間病欠調査」3C巢山

◎映画会(体育館) 十二・三〇～十六・一〇

・「山の賛歌」「燃ゆる若者たち」監督 篠田正浩

出演 山村絵、山田五十鈴、田村高広、岩下志麻

倍償千恵子、沢村貞子、他

・「運がよけりゃ」監督 山田洋次

出演 渥美清、飯田蝶子、藤田まこと、ハナ肇、犬塚弘、

田辺靖雄、倍償千恵子、他

◎招待試合 十三・三〇～十六・〇〇

木曾西高校と相撲、野球、柔道、庭球

◎レコードコンサート 十二・三〇～十四・〇〇

音楽室

◎展示会(本館・工芸棟) 十一・〇〇～十六・〇〇

本館1F

・科学部生物班 木曾駒高原の植生、木曾駒高原の昆虫、

作成した剥製

・保健委員会 木曾谷の薬草、百草の製造工程、握力・

背筋力・肺活量の統計

・新聞委員会 学校新聞が作られるまで、凸版類作成の

原稿と見本、商業新聞の新しい印刷法につ

いて(信毎松本支局の協力を得て)

本館 2 F

・写真部 自由課題七〇点

・工芸部 試作品二五点、各種電気スタンド、盆類、額縁等、塗膜試験について

・美術部 油絵、水彩画数一〇点、デザイン作品

・山岳部 登山用具紹介、山岳装備、山岳写真、高山植物等々

本館 3 F

・文芸部 有名文学作品の紹介、木曾谷の民話（前年から継続研究）、本校読書の実態

・林研部生産班 カラマツの総合的研究、

同 加工班 木材の化学分析実験、キノコの培養、郡下の製材状況調査

同 測量班 新しい測量機器

同 機械班 水運模型、昔の運材方法、集材機の模型等

工芸棟

・工芸展

一年 小物入れ、吊棚、飾りケース、マガジンラック、壁掛他、五〇点

二年 サイドボード、飾りケース、壁飾り、整理タンス、机、本箱、書棚、コタツ板（漆塗り）、花台、他

三〇点

三年 サイドボード、鏡台、テーブル、洋服ダンス、食器戸棚、下駄箱、整理タンス、応接セット、飾り棚

他、三〇点

・造形展

造形作品展示、工芸製図展、製図器具、作品等

林業棟 2 F

・茶道クラブ 茶の点前

● 第二日

◎ぐんま中芸公演 『ひとりっ子』（体育館）

第一回（生徒対象） 九・三〇～十一・四五

第二回（一般対象） 十三・〇〇～十五・一五

◎工芸展即売会（工芸棟） 十四・〇〇～

工芸展の展示作品

◎フォークダンス（校庭） 十五・三〇～十六・三〇

◎レコードコンサート（音楽室）

十〇・〇〇～十一・〇〇

十三・〇〇～十四・〇〇

◎展示会 九・〇〇～十六・三〇

前日に引き続き

● 第三日

◎音楽会 クラス対抗形式（体育館） 九・〇〇～十一・三〇

課題曲は「ともし灯」、自由曲は次の通り

1 A 「砂山」「真白き富士の嶺」

- 1 B 「仕事の歌」「旅愁」「線路の仕事」
- 1 C 「埴生の宿」「バルカンの星の下」
- 2 A 「銀色の道」「勇気あるもの」
- 2 B 「冬の星座」「里の秋」
- 2 C 「小さい秋見つけた」「やしの実」
- 3 A 「赤とんぼ」「のぼら」「家路」「名なし草」
- 3 B 「同期の桜」「これが青春だ」
- 3 C 「雪山賛歌」「いなかのバス」



写6-44 男子の多いフォークダンス風景

音楽部合唱

ブラスバンド演奏

◎演劇部演劇(体育館) 十二・三〇〜十三・三〇

『日本の河童』 原作 伊藤貞助

・スタッフ 演出指導 坪田春雄

演出 田村喜美男 2 A

舞台装置 尾崎・松瀬 3 C

照明 岡田・梅本 3 C



写6-45 音楽会はクラス対抗で美しいハーモニーを競いあった



写6-47 島倉千代子と  
ジュークエイセス、  
泉教諭詩「初恋」を  
島倉が歌う。

NHKテレビ「ふるさとの歌まつり」  
本校体育館にて（泉万珠男元教諭蔵）



写6-46 本校生徒と宮田  
輝アナウンサー

・キャスト

効果  
行者  
竜造

田中・巢山 3C  
田村喜美男 2A  
市川温 2C

村長 渡辺今朝幸 1C

河童 木戸勘一 1C

おつる 武居若子 1C

馬 音道真一 2C・安原豊 2B

◎閉祭式（校庭） 十七・二〇～十七・三〇

◎ファイヤーストーム 十八・〇〇～十九・〇〇

この昭和四二年、世の中は「いざなぎ景気」の中で十一月にはカラーTVが百万台を突破、前年からの新三種の神器が広まった。

一方、大学紛争は引き続き発生、六月には第三次中東戦争、家永三郎教科書訴訟、八月松本深志高校生十一人が西穂高岳で死亡、東京ユニバシアード大会に共産諸国不参加等々問題が多かった。

そんな中で八月十七日、NHKテレビ「ふるさとの歌まつり」が本校を会場に開かれて大盛況であった。こんな面白い話題も忘れられない。

## 二、見学旅行・修学旅行

昭和四六年（一九七二）、県下の高校進学率は八五パーセントに達した。それにつれて生徒の学力や興味・関心の多様化が進んで、専門分野の知識・技術を修得させる困難性も徐々に広がった。

そんな状況下で林業科・工芸科ともに各コース制の指導内容の充実に全職員で取り組んだ。林業科では遅れていた土木コース関連の施設設備の整備が進んだ。

創立以来「学理と実地の調和」を重んじて実施してきた見学旅行・修学旅行の考え方を更に大切に、一層特色ある内容を持たせるべく年々検討を重ねた。

たまたま修学旅行研究指定校となった事などもあり、毎年の一年生及び三年生の見学旅行・二年生の修学旅行に、各各コース別に独自の見学を採り入れたり、修学旅行のコースや見学先に抜本的見直しを図った時代であった。

当時の学校新聞からその一部を紹介してみよう。

### 1、林業科三年生 瀬戸川国有林見学（昭和45年6月11日）

上松から森林鉄道に乗り王滝営林署瀬戸川国有林へ向う。木の箱といった林鉄にガタンゴトンと揺られて一時間半、牧尾ダムを右手に眺めて王滝の田島駅についた。

下車してすぐ営林署で管内や瀬戸川国有林の話聞き、それより雨の降る中を瀬戸川国有林の見学に出かけた。

三百年も経ったヒノキ・サワラの精英樹、澄みきった川の流れと立派な林相との調和が強く印象に残った。雨の降る中、何時間も濡れて歩いた「心に残る見学」であった。



写6-47 国有林見学（昭和42年）

### 2、工芸科一年生 名古屋方面見学旅行（昭和46年10月4・5日）

バスで名古屋に向った。第一日はIH1として有名な石川島播磨重工名古屋造船所を見学、巨大な船に圧倒された。原子力船むつのスライドも見せてもらった。

笹徳印刷工業ではワンタッチシステムの機械化印刷を見学。次いで刈谷木材工業ではノックダウン方式という家具の製造工程を見学できた。



故曾我藤勇社長 (35回)

●コラム 曾我社長とインセンシードの芳香

木曾谷が終って急に空の広がったところに中津川市がある。多くの先輩が活躍する坂下管林署苗圃、本州製紙(株)中津工場、常磐産業(株)は、毎年、林業科生徒の見学先であった。特に常磐産業(株)は、曾我藤勇社長(35回)が

独力で築き、発展させてきた東濃を代表する企業である。その中心である鉛筆工場では、高能率の製材、加工技術の開発など、独特の木材加工の先端技術を見学した。さらに米国産鉛筆材インセンシードや企業経営の先見的講話の一端をうかがい感銘をうけたものであった。

曾我社長は多くの後輩を受け入れると共に、蘇門会東濃支部を組織して、その充実に努められ、さらに本校一〇年毎の周年記念には格段のご高配を賜るなど、母校愛にあふれた大先輩であった。厳しさと優しさをもった曾我社長とインセンシードの芳香は、今も生徒の脳裏に強く刻まれている。

(平成十一年一月十一日逝去 七九歳)

第二日は雨となり、岡崎城の見学は中止して一路トヨタ自動車工場へ向った。

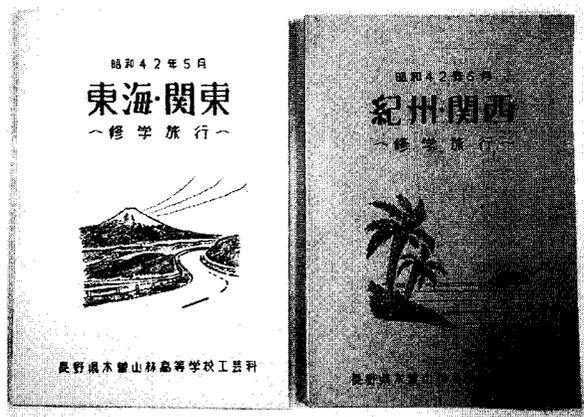
ベルトコンベアによる流れ作業で車のできる工程に驚くと共に、同じ作業の連続に不安も感じた。最後に杉江製陶でタイルの製造・デザイン等について学んだ。

見学したことは何に役立つかわからない。しかし、ただ見学旅行に行くから行つたというような考え方ではいけないと考える。

3、林業科二年 修学旅行(昭和46年10月4～8日)

①見学先

新日鉄名古屋製鉄所——石川島播磨重工名古屋造船所——登呂遺跡——野田合板富士川工場——同清水工場——竜華寺——東海大学海洋科学博物館——大昭和製紙吉永工場——大昭和観光園芸研究所——箱根——鎌倉——羽田空港——浅草国際劇場——農林省林業試験場——国際航業(航空写真測量)



写6-49 修学旅行のしおり（昭和42年）

②昭和四八年三月の新聞に掲載された修学旅行の「評」から「われわれは出発前、班別活動で見学地の事前研究をし、旅行中はこれらの研究資料にもとづき、また卒業後の進路との関連も頭において見学し、修学旅行終了後は結果をレポートにまとめて各人自分のものとするよう努めた。しかし終了後のアンケートでは、理解できた者五〇パーセントであり、全く理解できなかった者約一〇パーセントもあり、まだまだ準備や事前研究の不足を痛感した。さらに林業関係に興味を示さず見学意欲のない者も少数ながらあつて残念であつた」とあり、経済成長

と共に価値観が変わりつつある姿もうかがえる。

### 三、卒業生の進路状況

#### 1、林業科

昭和三十年代は、経済発展の進む中で年と共に生徒の多様化も進んだが、依然として「木曾山林」の伝統的地盤は受け継がれ、卒業生は旺盛な意気に燃えて全国の林業界へ進出して行った。

営林局や県庁等の官庁は、公務員試験（初級職）制度ができたものの、年によっては全国一の合格者を出すなど毎年多くの合格者を出した。

また測量士、測量士補の資格試験等にも多く合格した。殊に営林局関係では、北海道から近畿地方までの広域にわたって毎年進出し、「木曾山林健在」をアピールした。この外わが国屈指の林業会社、製紙・パルプ会社にも毎年採用された。

さらに木材問屋、新建材製造関係企業、測量設計会社等の新しい分野からの求人が増え、自主独立の将来を視野にした多くの人材が進出を始めた。

しかし、この時期は進路の大きな転換期であり、三十年代後半に向うと共に進路先も多様化の傾向が色濃くなっていた。

心に応じて存分に能力を発揮できる企業へ進出した。次第に「山林」の新しい基盤を固めていった。

この結果、卒業生の進路は、インテリアデザイン、金属・プラスチック加工等、従来とは全く異なった分野へ進出するように発展した。

わが国の木材工芸界が、より高度な加工、工芸デザイン等へと幅広く専門分化、深化する中で、本校もこれに対応して昭和三八年度より木材工芸科を工芸科と改称し、加工コース、デザインコースの二コース制を採用した。

## 2、工芸科

図6-10 昭和36年度～40年度の5年間の進路概要

		林業科 卒業生徒数 442人	
		就職者数	率(%)
官 公 署	営林局等林業関係官庁	80	18.0
	県庁林務関係官庁	15	3.4
	その他の官庁	33	7.5
	市町村森林組合等	13	3.0
会 社	木材加工関係	41	9.2
	紙、パルプ関係	19	4.3
	木材間屋卸関係	63	14.3
	林業関係	28	6.3
	造園	2	0.5
	測量設計関係	48	11.0
	土木建設	9	2.0
	林業関係以外の会社	54	12.0
官 庁	自営等	29	6.6
	進学	8	1.8

西山先輩などと呼んでしまつては恐れ多い、当社(大日コンサルタント株式会社)の偉大なる創業者です。

西山先輩(昭和十二年卒業)を偲ぶ  
五七回 松下 関雄

この頃だけではないが、本校生徒の就職先の一つに、先輩が創業した会社に先輩が次々と就職していく姿があった。大日コンサルタント(株)を創業した西山時老(34回)を例に、先輩の会社に就職した先輩の様子を見てみよう。

## 3、先輩の会社へ

図6-11 昭和36年度～40年度の5年間の進路概要

		工芸科 卒業生徒数 176人	
		就職者数	率(%)
会 社	家具製造関係	78	44.3
	楽器店等	16	9.0
	百貨店等	15	8.5
	建材関係	7	4.0
	建設	5	2.8
	機械、金属関係	5	2.8
	プラスチック加工等	6	3.4
	塗料、塗装関係	4	2.3
	船舶、車輛関係	4	2.3
	紙器製造	2	1.1
官 庁	室内設計	1	0.6
	官公署	8	4.6
	自営業	13	7.4
官 庁	進学	4	2.3
	その他	8	4.6

問がてら求人を訪れた西山先輩に、古屋校長先生と共に初めてお会いしました。



写6-50 故西山時老先輩  
(35回)

当時は、国・県など諸官庁によるプロジェクトでも職員による直接作業が一般的で、ごくまれに請負業者に委託されることがある程度でした。岐阜県庁職員であった先輩が、いち早くその後の技術業務民間委託に着目し、昭和二十七年という極めて早い時期に会社を起こしたのは、まさに慧眼というべきでありました。

三五年七月、岐阜県と滋賀県境にある伊吹山観光自動車道路の測量設計を近鉄から受注し、西山先輩の直接指揮の下で、私は現地の民家に宿泊して測量作業をしていたときのことです。月一度の帰社がようやく楽しみになった頃、私は西山先輩が運転する自家用車の助手席で現地に向かっておりました。会社を過ぎて一〇分ほどたった時、「おい君、道の左に電柱があるだ

ろう。会社を出てからここまで何本あったか?」??何を答えて良いのか、本数など判るはずもなく呆然と緊張する純情少年の私。「判るわけがないだろう。でも、走った距離とそこに見える電柱間隔から推定はできるはずだ」と。

要は注意力と判断力・応用力を問うていたのでした。

伊吹山観光道路が、当時日本国家を挙げて挑戦していた東海道新幹線・名神高速道路の近くに有った幸運を確実につかみ取り、受注に成功した。これらにより、現場を離れ経営に専念した西山先輩は、社員数名の会社から、三五〇名余りを擁し、年商約六〇億円、国内番付四〇番前後の中堅建設コンサルタンツを築き上げた。

さらに岐阜県測量設計業協会設立以来二〇年間会長を務め、全国組織の要職を歴任し、昭和六二年秋に勲五等双光旭日章を受賞、平成五年癌のため遙かに旅立たれました。

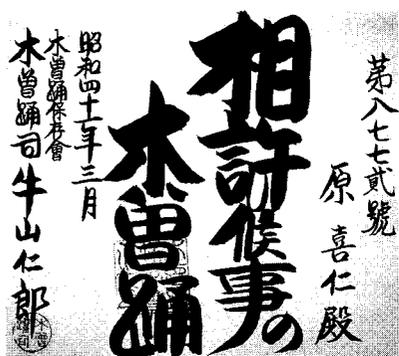
「おい君、注意力が足らんぞ!」叱咤される声が、今も鮮やかに甦ります。  
(大日コンサルタント(株)勤務)

●コラム 木曾踊り

本校を巣立てば、全国どこに就職してもまぎれもなく木曾人であり、正調木曾節をうたい、木曾踊りが出来なければ不都合である。

例年、そんなことで卒業を控えた特別教育に「木曾節」が登場した。講師は福島町の牛山仁郎さんで、体育館で特訓をして下さった。そして「相許し候事の木曾踊」の免許状をいただいて終了した。

また運動会の終わりには職員、生徒が輪になって木曾節をうたい踊ったこともあって、皆一様に上達が早かった。



写6-51 木曾踊り免許状  
(原喜仁・63回・南安曇農業高校教諭蔵)

四、盛り上がるPTA活動

昭和四〇年は、新教育課程への移行措置が完了した年であり、並行して、本校では生徒会活動、ホームルーム運営、PTA活動等に画期的な充実策が図られた年であった。

1、PTA規約の全面改訂

昭和二七年以来のPTA規約を改めて、四月より施行した。

その最大の狙いは、従来にも増して学校と家庭との連絡、協力を緊密にして、学校の教育に関する具体的施策が各家庭に充分届き、両者が一体となって教育向上にあたるPTA活動の活性化であった。

2、地区別組織

生徒の出身地から七地区、二九支部を組織した。

(この年、生徒数四四〇人、内、寄宿及び下宿生一〇七名)

〔地区〕〔支部〕

北部 榑川・木祖・日義

中部 福島・新開・開田・三岳・王滝

南部 上松・大桑・南木曾・山口

東北信 上水内・下水内・下高井・更級・南佐久

中信 北安曇・南安曇・大町・東筑摩・松本・塩尻  
南信 諏訪・岡谷・上伊那・駒ヶ根・下伊那  
県外 岐阜

### 3、定期総会・全員総集会

五月十五日の開校記念日に定期総会（第一日）、翌日（第二日）全員総集会を開催した。

第一日 本部及び支部役員により通常総会を行い、予算、決算、行事等の決定をした。

遠距離の父母は第一日夕刻までに、福島町いわや旅館に集合。同夜はホームルーム担任と夕食会の後、個別懇談をして一泊。

第二日 午前八時半より本校講堂で総集会。会長、校長の挨拶の後、総会決定事項報告。生徒指導、進路指導等々の諸報告。質疑等が行われ正午終了。その後個別懇談。前日より宿泊して参加した遠距離の父母は総集会終了で帰宅。近距離父母との個別面談が終る頃は薄暮となった。

P T A 総集会出席率は、ほぼ一〇〇パーセントで、遠い地区の役員の中には二泊三日の方も多かったが、それだけに学校と父母、父母相互の理解と協力が高まり、力強い連帯感が生まれた。

### 4、地区別 P T A

十月から年末にかけて、地区別 P T A を行い（二三日間）、教師が各地区を訪ねて諸報告、質疑、個別懇談を行った。例えば東北信は上山田の旅館等を会場とした。これとて他校と比べても父母の負担は大変であったが、出席率は高かった。

昭和三三年度の地区別 P T A では、大桑・開田・三岳王滝支部では出席率一〇〇パーセントとなるなど、各支部とも多くの



写 6-52 活発な P T A 総集会（昭和42年）

父母が参加し、大きな成果を収めた。その後、巢山校長の時には、さらに参加者は増大した。

●コラム 佐久から毎回通われたお父さん

岡部善司さん（南佐久郡佐久町）は、昭和三八年四月より三年間、東北信地区役員として、故郷を遠く離れた生徒とその父母のために、常に連絡を密接に取り合い、P T A活動に指導力を発揮された。

特に大変だったことは、本校での会議に出席される時には一回に一泊ないし二泊三日を要したことである。

しかし岡部さんは役員会、総会、地区総会等P T Aの諸行事に常に参加をいただき、その延べ日数は三年間で一〇〇日間を越えるものであった。

このご協力は、本校P T Aの歴史の中でも特筆すべき事柄であり、子息岡部滋（六三回）の卒業時、学校長巢山武雄は異例の感謝状を贈呈した。

尚、岡部さんは昭和一六年度本校に併設された森林組合技術員養成講習会の受講生であって、昭和二一年復員後に生まれた子息を林業科に入学させたという本校の強力な応援団でもあった。

平成十一年一〇月二一日、八九才で逝去。

これらは、当時P T A活動の活性化を目指して努力された巢山武雄校長、黒田三郎会長、さらにこれを継いで基礎を固めた原善造会長の尽力によるもので、以降本校P T A総集会は年々溢れんばかりの大盛会となって教育向上につながった。

さらにこのことは、多様化した生徒達に対して、P T Aと学校が連携してきめ細かく見事に対応したとも言え、特筆すべき一時代を築いたのである。

●コラム いわや旅館

木曾福島町の老舗旅館「いわや」と本校はかわりか深かった。先代の児野清志は十七回卒業生であり、地元福島蘇門会の会合はほとんどここで催されてきた。

また、郡外、県外からの入学生は先ず「いわや」に一泊し、翌日の入学式に臨んだ者が多かった。

昭和十八年には、学徒出陣の送別会が開かれた歴史の一場面もあった。

寄宿生の多かった昭和四十年代までは、毎年P T A総会に出席の父母が、前日「いわや」に宿泊し、当夜は舎生、職員と夕食を共にしたこと。その他、歓送迎会等々、本校の行事で「いわや」に思い出を持つ人は多い。

図6-12 地区別 PTA 出席状況

P T A 時 報

1958.12

11月22日(土)			11月15日(土)									期日	
洗馬村	宗賀村	塩尻市	木祖村	日義村	大桑村	神坂村	吾妻村	読書村	北安曇郡	南安曇郡	東筑の一部	松本市	地区奈
			24	15	11	13			9	51			会員数
			13	11	11	10			6	36			出席員
			95	54.7	100	76.9			66.6	70.6			出席率%
桔梗ヶ原高校			中学校	中学校	さくらや旅館	スハラ駅前	石川の屋	みどの	大町南高校	蟻ヶ崎高校			会場
大熊孝一			田中実男	長谷川三次	古瀬文夫	余間利一	田口悦夫		青木薫	正村武之			地区幹事

本年度十一月開催された地区別P・T・A出席については、各地区の幹事さんの御骨折りにより相当の成果があげられました。その状況は次の通りであります。

地区別 P T A 出席状況

11月29日(土)				11月26日(水)					11月22日(土)				期日				
諏訪郡	上伊那郡	県外	新開村	福島町	生徒会	北信	静岡県	下伊那郡	王滝村	三岳村	上松町	開田村	榑川村	片丘村	広丘村	朝日村	地区奈
11		78			11	27	23		57	8	27						会員数
9		38			8	22	23		47	8	17	42					出席員
81.8		48.7			27.7	81.5	100		82.5	100	63.0	73.7					出席率%
上伊那高校			本校			更級農校	長姫高校	林屋旅館	下野久孝	東分校	公民館	開田中学校	榑川中学校	桔梗ヶ原高校			会場
木下廉			戸田繁代	沼田鎌一	鎌田正	深沢三次郎	西沢喜代美	永井正春	稗田勇雄	小野久孝	中藤輝雄	三浦春雄	木村重市	八田恒男	榑山恒男	塩原彦郎	地区幹事

松本地区へ集合の東筑の範囲は四賀、日向、波田、山形、明科、坂北とする。

図6-13 地区、支部別出席状況について

昭和41年7月19日

	榑川	木祖	日義	福島	新開、開田	王滝	三岳	上松	大桑	中信
会員数	34	29	24	53	43	11	24	60	45	47
出席数	28	26	24	34	30	11	20	42	39	32
出席率	82	90	100	64	70	100	83	70	87	68

## 五、創立七〇周年記念と蘇門会

### 1、創立七〇周年記念事業

昭和三八年（一九六三）創立六〇周年の大事業を終えて、数年後には七〇周年記念事業のことが話題に上がり、同四四年には蘇門会・PTAを中心に具体的な検討に入った。

そして主な事業は格技室建設等を中心に、同四五年七月、期成同盟会の設立総会が開かれ、事業計画・資金計画などが決められ、募金及び県への陳情が行われることになった。

具体的な計画は次の通りである。

### 創立七〇周年記念事業計画

- ① 格技室（柔道剣道場）新築 一一〇八万円
  - ② 格技室付属器具庫 一〇〇万円
  - ③ 建物移転（漆工室） 七〇万円
  - ④ 校地購入（校門付近一四〇坪） 二二二万円
  - ⑤ 土地整備（前項の整備） 六八万円
  - ⑥ 蘇門寮（会館）用地購入 六二万五千元
  - ⑦ 視聴覚設備・林業科施設の充実 八五万五千元
  - ⑧ 事務費、募金費、その他 一五〇万円
- 事業総額 一八六六万円

同 資金計画

- ① 県費負担分 九九二万円
  - ② PTA負担 二二〇万円
  - ③ 蘇門会負担 三三〇万円
  - ④ 特志寄付 三二四万円
- 総計 一八六六万円

新築したばかりの格技室と第二林業棟

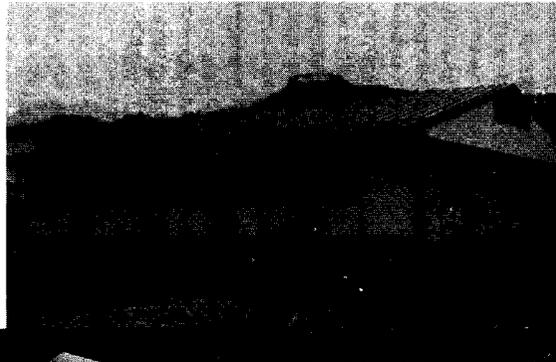


図6-53 格技室

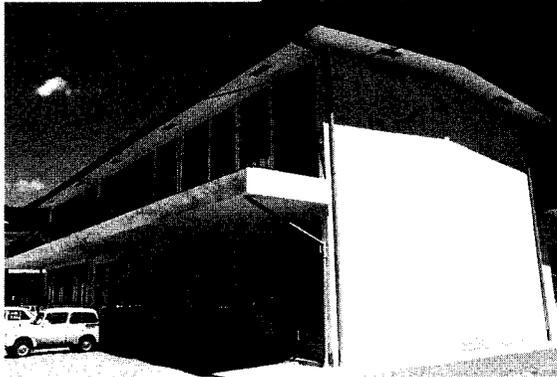


図6-54 第二林業棟

こうして昭和四七年四月、付属施設を含め格技室が完成し、また併せて産業教育振興法に基づく施設の充実を期す第二林業棟も三月竣工した。

五月十四日には、盛大な七〇周年記念式典を開催することができた。

奥原行雄PTA会長が「蘇門会の方々の母校に対するひたむきな愛着の精神の美しさ」と驚嘆したごとく、その熱意と行動力は、脈々と受け継がれた山林魂であろう。

それが七〇周年記念事業にも大いに発揮され、県下でも体育施設の充実した学校となった。以後ここから母校の榮譽を担う幾多の選手が育ったことは言うまでもない。

また、蘇門寮用地購入は、蘇門会館建設へ大きなはずみを付け、新たな希望をもたらした。

## 2、このころの蘇門会

昭和四七年の蘇門会組織は図6-14の通りである。

古希の齢を迎えた『蘇門会報』に第一回原四郎、第二回温井誠一、第四回松館藤太郎、第七回高柴真治郎など、明治時代の卒業生が、かくしゃくとして寄稿されている。これこそ誠に蘇門の歴史の輝きを見る思いである。



写6-55 蘇門のきずな 青森営林局永年勤続者表彰式にて松館藤太郎（4回）の紹介により安江宗七青森営林局長（27回）から祝杯を受ける山下尚（18回）

創立一〇〇周年を記念する今、既に遠く旅立たれた大先輩に哀惜の情を禁じ得ない。

## 六、この頃の寮生活

昭和三八年八月十八日、校舎全面改築の一環として新寄宿舎が完成し寄宿生は引越した。一室四名、定員八〇名の新望岳寮が発足した。しかし、この頃、県外からの志願者は減りはじ

図 6-14 蘇門会組織

支部名	支部長	副支部長	事務局主任	支部長住所
福島	佐藤 誠一	黒田 三郎	沼田 泰男	本宮郡本宮福島町
開田	千村 義部		本宮郡開田村	同上
三岳	松形 正人		本宮郡三岳村	同上
土津	松原 誠一		本宮郡土津村	同上
上松	武富 芳夫	◎入道 昭平	本宮郡上松町	同上
大森	小林 謙平	高橋 孝一	本宮郡大森村	同上
流青	久保田 邦夫	樋口 幸男	本宮郡南本宮町	同上
吾妻	高柴 貞治郎		本宮郡南本宮町	同上
日養	上垣 外久	神村 敬二	本宮郡日養村	同上
本祖	山崎 多門	湯川 武雄	本宮郡本祖村	同上
楠川	二輪 啓内	宮原 云	本宮郡楠川村	同上
安城	林 光明	◎中多基	本宮郡津波田村	同上
長野	千村 吉雄		長野市	同上
佐久	中野 派一郎		南佐久郡	同上
飯山	奈良 俊朝		飯山市	同上
大北	小畑 輝雄		大北郡	同上
上伊那	山口 孝彦		諏訪市	同上
下伊那	谷口 昭衛	樋口 辰雄	飯田市	同上
山梨	横井 正守	◎船口 茂八	甲府市	同上
東京	森下 雅	川合 敬	国分寺市	同上
前橋	田口 幸治	矢野 下房	前橋市	同上
名古屋	原 耕三		名古屋市中区	同上
東濃	曾我 肇男		中津川市	同上
岐阜	西山 時老	魚山 稔	岐阜市	同上
飛騨	井上 圭介		高山市	同上
近畿	朝日 竹芳	◎榊野 政男	奈良市	同上
九州	大崎 新男	佐々木 好之	福山市	同上
盛岡	山下 尚		仙台市	同上
盛岡	山崎 二男		盛岡市	同上
秋田	藤野 増雄		秋田市	同上
青森	松原 藤太郎		青森市	同上
函館	安藤 正幹		函館市	同上
札幌	左門 左門	橋本 友一郎	札幌市	同上
旭川	池田 孝太郎		旭川市	同上
北見	小垣 朝幸		北見市	同上
帯広	林 政男		帯広市	同上
大昭和製紙	鈴木 佳六		大昭和製紙	同上
十條製紙	神代 光政		十條製紙	同上
長野営林局	上村 三喜雄	和田 幸造	長野市	同上
長野県庁	黒倉 今朝雄		長野市	同上
坂下地区	小泉 昌久	小泉 軍平	坂下地区	同上

上伊那支部は役員が未定です。◎印のついた支部への連絡はその方へ連絡下さい。

- 副会長 中村 治郎  
 副会長 佐藤 誠一  
 監事 高柴 眞治郎  
 神庭 芳夫  
 顧問 千井 瑛郎  
 本宮郡上松町  
 ◎本宮福島町  
 ◎本宮福島町  
 ◎南本宮町  
 ◎開田村  
 ◎本宮福島町

昭和四十七年十一月現在

めたが、県内は依然として各地から入学する者が続いた。

その一方で、集団生活の寄宿舎よりも自由な下宿生活を望む者が次第に目立つようになり、学校に近い杭の原から町内にかけて一人〴〵二人規模の下宿が生まれた。戦前から小さな下宿屋はあつたが、やがて町内には本格的な下宿業を営むものも現れた

また遠距離通学生を抱えた郡内の村には、福島町に寮を設けて通学の便をはかるなど、高校進学率の向上に伴い止宿形態も多様になった。

### 1、寮生の出身地

この時期は、本校の特徴であった県外出身の生徒が減り、郡内の生徒が多くなった。しかし、県内各地からの生徒は多く、寮生活に青春をおくった。(図6-15及び部門・資料編参照)

### 2、寮生活の思い出

#### 在学当時の思い出

六〇回 伊藤勇二郎

私は山林六〇回卒業の伊藤勇二郎です。

このたび創立百周年を迎えられるとの事、心よりお喜び申し上げます。

図6-15 出身地別生徒数

		年度				
		36	37	38	39	40
郡内	木曾郡	241	223	260	311	337
	下高井郡	2	2	2	下水内 1	
郡外	中野市	1	1		上高井 1	
	上水内郡	3	5	4	7	6
	須坂市	1				
	長野市	1	1			
	更級郡		2	3	3	
	南佐久郡	6	5	6	2	6
	北安曇郡	7	3	1	1	1
	大町市		2	4	4	2
	南安曇郡	11	11	7	5	4
	東筑摩郡	42	13	8	8	8
	松本市	16	19	13	11	16
	塩尻市	14	22	11	10	7
	諏訪郡	1	1	2	2	
	茅野市	1	1	1	1	
	諏訪市	1				1
	岡谷市	2	1			1
	上伊那郡	4	7	8	9	9
	伊那市	2	1	1	1	1
	駒ヶ根市	1			1	
	飯田市		2	2	1	2
下伊那郡	11	11	8	15	10	
(小計)	(127)	(110)	(81)	(83)	(72)	
県外	岐阜県	13	13	12	12	6
	静岡県	4	2			
	愛知県	1			2	
	高知県	1	1			
	(小計)	(19)	(16)	(12)	(14)	(6)

振り返りますと人生で一番多感な三年間を山林高校で又寮生活で過ごせた事を幸せに又誇りに思っております。

時々思います。社会生活の中で又商売上苦しい時あの寮で殴られ鼻血を出し、腹を押さえて耐えた時の事を思い出し、生活の、そして仕事の励みにしています。

今の教育の中では通用しないと思いますが、我々の時代は通

用したのです。今あの厳しさが、良い、悪いは別として、私は良い方に理解しています。

私の三年間は寮が学習の場であった様に思います。

時々食事の時に言います。今食べている一番のごちそうより、なぜか寮のドンブリにかけて食べた「ふりかけ」の美味しさを家で話すのです。「ふりかけ」の話の後は、人間は一日をグラグラ過ごすより数時間「ビシッ」とやればその日の満足感が出るものと。それは寮で夜七時より九時頃までの二時間の自習の時間、もの音一つしない、あの広い二階建ての十三室八〇人も学生が一つの事に没頭する時の空気は、言葉では言い表せない時間でありました。

そのおかげかどうかわかりませんが、イベント等に対し、いつも上クラスであったと記憶しています。

先輩は恐ろしかった。世の中に恐ろしいものがあることが大切、今大事であること。そして人をかわいがる事も教えていたのだ。

恐ろしいといえば舎監の泊りの先生も恐ろしかった。でも時には父の面影とダブルラセ、兄の様な気もし、友達とも言える様な付き合いができた喜び、今ではただただ感謝するのみであります。

私は野球部で、とにかく野球が好きでした。毎日石コロだらけのグラウンドで暗くなるまで「球」を追いました。あれは「白球」ではなくて「黒球」でした。いくつあの黒球を黒川ダムへ

入れた事か。ダムと言えば、夜ダム湖で消火用ホースで水をまきスケートリンクを作り大会もしました。今から思えばよくあんな事が出来たと思います。町で火災が出れば寮生ほとんどで消火に行き食堂にはいろんな表彰状がありました。消火の帰りにリングが無くなり警察から苦情が来た事も。他にもいろいろあるが忘れる事の出来ない寮生活でした。とにかく全国にいくつか高校がある中で、授業を受けるのに教科書をザブトンに挟んで教室に行ける学校は、他にないではないだろうか、そんな気がします。

私は思ったことはハッキリ言いたい性格でしたから、三年の時全校集会で学校側に苦言を呈しました。その後進路で校長室で昼食を取る順番にあたった時、今でも人生の教訓としていることがあります。校長先生が「伊藤君、君はものを言う前に一呼吸置いてものを言うようにしたらどうか」と言われたことです。この言葉が頭の中にいつも残っていて、年が過ぎて生活の中で役立たせていただいています。

校長先生の名はたしか上条善昌先生であったと思います。

他に何人もの先生から年賀状をいただき、いつも何か言葉をいただいています。感謝にたえません。

いろいろ思い出を書きましたが、いくら書いても切りがありません。でも最後にこれだけは記しておきたい。それは、三年間に人生の基礎を教えてもらいました。「人間は自分一人では何も出来ない、周りの人達がいて自分がある」ということを教



写6-58 さあ学校へ



写6-56 朝食風景



写6-57 寮母の皆さん

寮生活のスナップ  
1962年度『望岳寮』アルバム



写6-61 入浴、裸の付き合い



写6-59 室内の購買



写6-60 洗濯も自分で

えてもらいました。寮生活、野球部、同級生そして教師……。今でも二年ごとに野球部の同級生と会っています。私が生まれた岐阜県と育ててもらった長野県、県が違うとはいえ二年ごとに会う喜び、楽しみ、待つ喜び。兄弟、家族より気が合う同級生を与えてくれた学校、私は何よりも「木曾山林」が好きです。そして、木曾山林高校がふる里であり育ての親であることを誇りに思い、残された人生を木曾山林卒業生である事を人生の糧として二十一世紀を生きてゆきたいと思えます。

最後に在校生の皆さん、そして先生方のご健勝、木曾山林高校のご発展をお祈り申し上げます。  
(了)

## 第五節 このころの校長と職員

### 一、思い出の先生方

大山林形成を夢みられた先生方

四一回 古川 彦次

P T Aの改革 巢山武雄校長先生

昭和三九年四月より四一年三月まで、第一三代校長を務められた。先生は放胆と緻密・細心を併せ持ったような行動的な校長であった。

僅か二カ年の在職であったが、旧講堂の移転改装、演習林管理室新築等のほか、特に校庭拡張整備事業、林業科コース設置に尽力された。またP T A総集会全員参加の画期的改革を果たされた。

生徒会行事には率先してあたられた。たとえば夏の水泳大会に禪一本で真つ先にダム湖に飛び込む勇姿を見せたり、生徒を愛するためには職員を大声で叱咤し、逆に生徒から「先生を叱りすぎる」と申し込まれたりもした。

麻雀がなにより好きだったり、小型バイクでまだ悪路だった一九号線を県庁まで突っ走ったという武勇伝等々多くの強い印象を残した。

平成九年七月七日池田町にて逝去。

### 「大山林」形成 今井邦夫校長先生

昭和四三年四月より五年間、第一五代校長として在職された。当時は大学紛争、ベトナム反戦運動、よど号ハイジャック、成田空港闘争、連合赤軍事件等々世情騒然の時代で校内でも教職員組合の闘争がしだいに熾烈化し、日夜苦勞が多かったことと思われたが、先生は温顔と不動の心で貫かれた。

在職中、体育教育研究指定校や修学旅行研究指定校等の研究指導や特に本校創立七〇周年記念に関連して格技室及び第二林業棟の新築、蘇門会館建設用地の買収を進められ、昭和四七年五月一四日記念式典挙行等、数々の重責を果たされた。

古希を祝う学校新聞に先生は『二世紀へ向かって「大山林」を形成する義務と責任がある。「伝統なき創造は盲目であり、創造性なき伝統は空虚である」という。立派な伝統の上に立って、創造性をもって新しき伝統を作り上げる意欲こそ不可欠である。私は「過去に感謝し現在に努力し、未来に奉仕する」という生活態度が最も望ましいと信ずるが、創造的意欲はこのような心構えによってこそ具体化が可能になる』と寄せられた。生徒に対し常に「目標を持って行動せよ」といわれたお姿が浮かんでくる。

平成十三年一月二八日に御代田町にて逝去。

バルサウツド先生 上嶋積善先生のこと

先生は、昭和十六年六月十日本校に着任。昭和三二年三月まで、十六年間（この間兵役にも服された）勤められた。

東京高農林学科を卒業後、何でも満州で活躍もされた由、生徒にとっては大きな兄貴のようで、声の大きいことも特徴だった。本校赴任後にたちまちついた「バルサ」のニックネームは、多分四十回生あたりが付けたのだろうか。語源はバルサウツド。昭和三二年、上伊那農高に転任されたが、バルサの方が先に行っていたという逸話もあった。

先生には林学のほかに数学も教えていただいたが、「代数」の問題を一度に一〇〇題ほど出して、明日までに解くように命ぜられたことが、二度、三度とあった。鉄は熱いうちに打てという通りで、生徒は大いに実力を向上できたものであった。

先生はどんな場合でも理非曲直を糺す正論を吐かれ、生徒には自主、自助の助長を促して細かな配慮をされた。

神庭先生を敬愛され、共に酒を好まれた。酔いに任せて時には裸踊りまで披露されたが、これを知った生徒は一層バルサへの親愛の情を示したものであった。

昭和五六年、既に退職されて奥様と二人で松本市に住んで居られた先生に本校講師を依頼したところ、早速福島町に下宿されて、講師の枠を超えて毎日朝から晩まで勤めて下さり、それは山林を愛する昔のままの姿であった。

職員会議で議論が分かれた折などに、程よいタイミングで

「校長さんの意見に賛成」と教え子を盛り立てて下さったことも幾度かあった。有り難い思い出である。

平成七年、病を得て信大病院で咽喉部切除手術を受けられた。筆談で「一日が長いよ」と書かれた時は、胸を締めつけられる思いであった。

平成八年二月十九日逝去。

インテリア科の基礎作り 下島万夫先生

インテリア科 柿崎庫之助

下島先生は開田村のお生れで東京高等学校木材工芸科を卒業され、昭和二十年（一九四五）本校へ赴任した。

本校へ赴任してきた最大の目的は、木材工芸科の設置のためであったように想像される。記録によれば、当時の渡邊勇校長は木材工芸科設立に奔走されたが、細部については、現臼田高校等を見学し、下島先生が作成したものと思われる。

戦前木工専修科が短期間設置され、設備が残っていたとはいえ、戦後の物不足の折、同二二年木材工芸科の設置が決定されるまでは、大変苦労されたことと推察できる。

一年後には、木工工場、木工機械工場他関連施設の落成、教育課程の作成と木材工芸科の基礎作りを在職中の前期に行っている。

私が出島先生と出会ったのは、三四年である。以来退職されるまで、近寄りがない存在ではあったが、いろいろなことを教

わった。

三五年、校舎全面改築が始まり、現在の校舎の内部設計をほとんど一人で、工事の進捗状況、業者との折衝、記録の収集等も指導し、大きな事業を完成された。

一方教科指導においては、製図や室内装飾、木工材料などの授業を行い、教材不足を補う材鑑作り、木材の顕微鏡写真を作ったり、木材工芸科が一時低迷した時、PR用パネルをたくさん作成して中学校回りをしたり、その行動力はすばらしいものであった。

そんな忙しい中であって、趣味は広く、特に版画はすばらしいものであった。当時職員や関係者の有志による手製の刊行物「曾流」があり、その表紙は下島先生の版画であった。さらに率先して職員旅行の企画・実行に努められ、職員の融和、明るい職場づくりに尽くされた。

酒は飲めるし、女性（芸者）にはもてた。あだ名は「ぎよろ」と言っていたが、鋭く大きな目をしていただけからと思われる。笑うと優しい目をしていた。長髪で白髪、大柄な先生であった。

木材工芸科の設置に力をそそぎ、校舎の全面改築、木材工芸科から工芸科への科名変更、女子生徒の入学と、大きく動いた時代であったが、方向を見失うことなく、今あるインテリア科の地盤づくりを二〇年間していただきました。

短期間ではあったが、教頭となり昭和四〇年（一九六五）退職された。余生は「ふもとや」のご主人として送られ、昭和五

六年五月二二日逝去された。なお「ふもとや」は、現在も開田村末川において旅館と蕎麦屋を営業している。

佐々木弘文先生のこと

#### 五四回 原 貞夫

先生は教諭として昭和二九年四月から五三年三月までの二四年間と、昭和五九年から二年間にわたって教頭として勤務されました。

初めの二四年間にはいろいろなエピソードが生徒の間で伝わっておりますが、その一つに、あだ名の「たぬき」があります。

これは、いつごろからかははっきりとしておりませんが、多分授業の中で行われた「炭焼き」実習の乾燥炊きの際に出る煙が狸のいぶりだしに煙を利用するなどの話から付けられたものと思われます。

この炭焼き実習については一週間は生徒とともに宿泊をされ昼間は授業を、夜は寝ずに生徒といろんな話をしながらの窯の温度管理をと今思えば若さに任せての徹夜の連続でした。

そんな中でも生徒は悪さをする者もあり、隣のリング園に入つて盗みをした生徒を連れて謝りに行つたりと大変だったと聞いております。

また、夏の暑い時にはパンツ一つに白衣を着て教室に現れ授業をするなど、当時としてはちょっと変わった先生と生徒に思われていたように思います。

しかし、生徒の中に飛び込んでいろんなことを話され、また、よく生徒の悩みなどを聞いてくれて頼りにされておりました。

生徒会活動でも特に応援活動の指導では、独特の振付で三七拍子を編み出してくれたり、相撲の取り口についての説明をユーモラスにするなど、校内はもとより西校との相撲大会においてもその役目をされ、山林になくはならない先生として信頼を集めておりました。

研究関係においても大変熱心で東京教育大学に内地留学（半年）されたり、カラマツの挿し木については電力会社との共同による熱線利用の電熱温床によって研究を進められ、発根の成功をみました。

また、演習林に発生したカラマツのミドリキハバチについても農業教育研究会において発表するなどしております。

時には失敗をしたこともあったようです。給料日にお酒を飲んでどこかに給料袋を落としてしまったということがあったとも聞いております。また、大桑村に住んでおられたこともあり列車での帰りにお酒を飲み中津川までも乗り越してしまつたため、ときには帰りの列車に大桑駅下車との荷札を付けて乗られたなどの話も聞いております。

先生はまた、林業の専門書を図書館へ寄贈された。

先生が家を建てられた時には、卒業生が資材を提供するなど慕われました。

平成三年九月二日逝去。

## 二、職員クラブ

同じ学校に勤める教職員相互の親睦を深める目的で職員クラブが組織されていた。毎月何がしかの会費を積立て、傷病見舞い、慶弔や送別等に充てた。

### 1、職員旅行

いつ頃から始まったのかは定かではないが、クラブ事業の一環に職員旅行があった。学校の休日を利用して、一泊二日の小旅行から四泊五日ほどの大旅行まで行つた。現在のような航空機やクルマ社会ではなかったが故に、名所旧跡や名物をたずねる旅の楽しさは又格別のおもむきがあった。

例えば昭和三三年一〇月、紀伊半島一周の旅には十二名が参加した。尾鷲——木本間の鉄道はなく、国鉄バスで「矢の川峠」を三時間もかけて越えたり、瀨峡へはプロペラ船で往復六時間を費やす旅だった。

新宮市の浮島の森で、神庭先生が樹木名札の誤りを指摘されたことから、園内の点検を依頼されるという一幕があり、神庭先生のお陰で木曾山林の名声をあげたものであった。

この職員旅行は昭和六三年頃まで行われた。職員旅行は、校内の職員の和を深め、本校教育にも好影響を与えた。



図6-62 日本ライン下りを楽しむ職員

### 2、「曾流」の発刊

昭和三七年一〇月、冊子『曾流』が生まれた。

職員クラブに曾流会を設けて季刊同人雑誌『曾流』を発刊したのである。創刊号はA5判、ガリ版刷一〇四ページで、すべて曾流会員手作りのもの。編集・発行責任者は泉万珠男教諭で、表紙は下島万夫教頭が得意の版画を作って一枚一枚はった。



図6-62 『曾流』創刊号

『曾流』は会員異動の中を引継がれ、十四年後に第一〇号記念号（二二四ページ）発刊に至った。

本校から転出した教職員が各地で会員を増やし、昭和五〇年には、県内外四三校、県、市職員に及ぶ二〇九名となり、まさに、尽きぬ木曾川の流れを思わせた。

●コラム 韓国の光東山林高校より

「日本の木曾に一つ、インドに一つ、韓国に一つの山林高校だ」

昭和四二年ころ、韓国の林業高校である光東山林高校の沈斗変校長から、本校の鷹野貞雄校長宛に次のような手紙が来た。

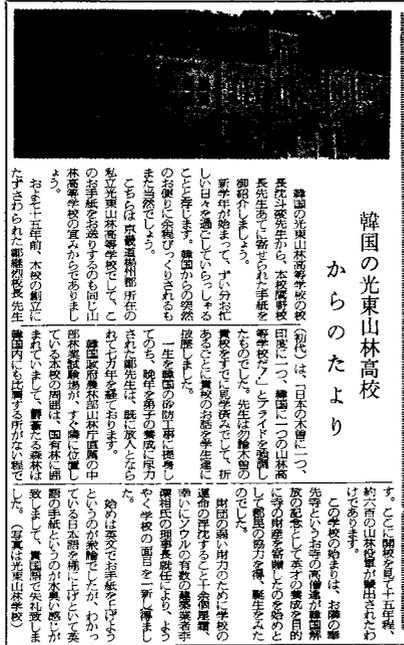
こちらは京畿道楊州郡所在の私立光東山林高等学校として、このお手紙をお送りするのも同じ山林高等学校からの宜みからでありましょう。およそ十五年前、本校の設立にたずさわられた鄭繼烈校長先生（初代）は、「日本の木曾に一つ、印度に一つ、韓国に一つの山林高等学校だ！」とプライドを強調したものでした。先生は勿論木曾の貴校をすでに見学済みでして、折あるごとに貴校のお話を学生達に披瀝しました。（以下略）

『木曾山林高校新聞』 62号

同じ森林・林業を学ぶ山林高校同士、お互い仲良くしましょう、との手紙である。同校は、一九五三年七月十

写6-64

昭和42年7月7日（金曜日）1967年 木曾山林高



五日に設立認可された高校であるが、初代校長鄭繼烈氏は本校をモデルに山林高校をつくられたのであろうか。これも本校ならではの話である。

駐日韓国大使館文化院図書室並びに教育官室李忠浩氏によれば、現在は光東総合高等学校と改称して、普通科と商業科をおく高校になっているという。

